

ひな
ゆめ
ファン
の
止まり
木

ク
リ
ス
マ
ス
合
同
本

2 0 1 4

目次

(著者名は敬称略)

健全メイド・ダイマリアー	著者…双剣士	3
赤鼻の執事	著者…ネームレス	6
それが彼らのクリスマス	著者…羊田ペンタ	16
クリスマス・キャロル	著者…ロッキー・ラックーン、挿絵…ピーすけ	32
きらきら☆変装曲	著者…ピーすけ	52
セキセツ	著者…春樹咲良	72
OVER on 12/24ー現地時間	著者…明日の明後日	80
著者あとがき		84
編集後記・奥付		91

本書は、「ひなゆめファンの止まり木」における
年末企画「クリスマス合同本²⁰¹⁴」に投稿して
いただいた有志の皆様による作品集です。

公開サイト…ひなゆめファンの止まり木
<http://soukensi.net/perch/>

クリスマス合同本²⁰¹⁴の趣旨説明と受付ページ
<http://soukensi.net/perch/sp/xmas2014/patio.cgi>

健全メイド ダイマリアー

著作

双剣士

十二月二十四日

ハヤテ君が来てくれて
今日で一周年ですね

お祝いをしないと

私のお誕生日でも
あるんですけどね

素敵なプレゼントの約束
ハヤテ君は覚えてて
くれるのかしら？

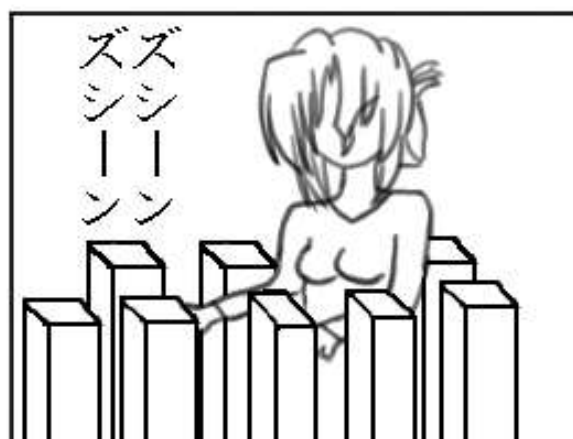
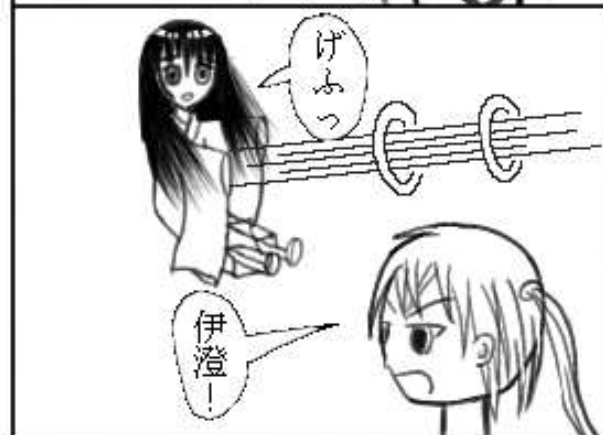
ハヤテ様、僕にも
クリスマスプレゼント
ちょうだい！

ちよっと、カンタ
失礼でしょうか？

いいんですよ、恋葉さん
プレゼントをもらえない
子の気持ちは、僕にも
分かりますし。はいこれ

結構本気で
楽しみにしてた人

ゴキウゴキウ...





HAPPY (?) END

赤鼻の執事

著者…ネームレス

「え？」

そんな僕の考えを否定するかのようにお嬢様は言った。

「これは夢だ」

「どうしたんですかお嬢様」

「いや、だからなハヤテ」

——これは夢だ。

その言葉から、猛吹雪と豪雪によって閉じ込められた別荘の中で〈夢からの脱出ゲーム〉が始まったのでした。

「えーと、前にもこんなことがあったような」

「コ○ンくんの時だな」

そう。あの時はコナ○くんを見つけることで脱出ができた。

なら、今回も。

「今回は恐らく○ナンくんではない」

「で、では今回は」
「恐らく……クリスマスだからサンタさんだ」
「サンタさんですか？」
「ああ」
「で、では大急ぎで捜しましょう！」
「いや……」

僕が慌ててそう提案すると、それも否定。何かを考えるかのように目を細める。

「前回のことがある。慌てて捜しても見つからないだろう。なら……」

「なら？」

「ここに来ているはずの人間を捜せ！ まさか私たちだけではないはずだ！」

「わ、わかりました！」

僕は大きくて別荘中を捜し、集まっている人たちを集め

た。

「みんなー！ 久しぶりー！」

水蓮寺ルカさん。

「えっと、ここどこ？」

春風千桜さん。

「ふうー、ふうー、美少女、はあ、はあ」

黒タイツさん。

「さっ、早くこんなところから出てしまいましょ」

アーたん(※アリス)。

「み、みんな……逃げなきゃ！ 早くここから逃げなきゃ！」

西沢歩さん。

以上だった。

……………。

『こいつは誰だー！ー！ー！ー！』

「ふひひwwwさーせんwwwwww」

「早く逃げようよ！」

いや、捜してる時は気にしなかったけど誰だろう。

「ハヤテー！ なんでこんな奴連れてきたー！」

「ハヤテくん怖いよー！」

「ど、どうにかしろ！」

「そうじゃなくて逃げなきゃ！」

「金髪幼女ー！」

「きゃー!？」

バシン

「ありがとうございます！」

「は、ハヤテ！ 早くなんとかしなさい！」

珍しく狼狽するアーたんを見て、かなり危機的状況であることに気づかされるけど、ど、どうすれば……！

「くっ、ここは僕が！」

「おい坊主。やめときな」

僕が皆さんの前に立つと、黒タイツはとても渋い声で——言った。

「俺は、男でもイける口だ」

.....。

「死ねええええー！！！！」

「ありがとうございます！」

黒タイツは蹴りをまともにくらい、壁に激突してそのまま気絶した。

「はあ、はあ」

「よくやったハヤテ！」

「やったですわ！」

「怖かったー……」

「リアルだと怖いな黒タイツ」

そうやって、皆さんと安堵していると、

「いやだから逃げなきゃ！」

西沢さんがそう叫んだ。

「さつきから逃げなきゃ逃げなきゃうるさいぞハムスタ
ー。悪は滅びた。あとはサンタを捜せばいいだけだ」

「え？ サンタさんを捜せばいいの？」

「そうなのですか？」

「恐らくな」

「だ、ダメ！」

「ど、どうしたのですか西沢さん」

なおも何かに焦るように否定する西沢さん。
まるで、何かを恐れているような……。

「たく、さつきからうるさい奴だ。もういい。みんな、ハムスターは無視して搜索を」

「いや待て。ちゃんと話を聞こう」

「そうですよお嬢様」

「……ちつ。なにかあるならさつさと話せ」

「え、えっと」

その瞳は明らかな恐怖を写していた。
みんなの視線は西沢さんに集中する。
そして、意を決したように西沢さんが口を開く。

「見ちゃったの」

「なにを？」

「サンタを」

「どこでだ？」

「最初に気付いた部屋で。外に、サンタがいたの」

「それが」

お嬢様は言葉を切った。

そう、これはおかしい。

前回は、コ○ンくんを見つければ脱出できた。

なのに、今回はサンタさんを見つけても、西沢さんは脱出していない。

じゃあ、僕たちはいったいどうすればここから？

そんな疑問が膨らむ中、西沢さんは続けた。

「青白い皮膚で剥き出しの目でギョロギョロ周りを見てたサンタさん」を」

一瞬、混乱する。

青白い皮膚に剥き出しの目。たしかに異常かもしれぬ。

でも、そこから西沢さんがここまで恐れるようなサンタ

さんが出来上がるのかな？

答えは、破壊音と一緒に訪れた。

バン！

『っ！』

壁が崩壊した。

「あ……ああ……あああ！」

“それ”はいた。

青白い皮膚に剥き出しの目。それだけではない。異常に長い手。拳は大きく、まるでハンマーのようだ。西沢さんが“サンタさん”と称したことからもわかる通り、“それ”はサンタさんの格好をしていた。

余りにも醜悪な見た目とファンシーなサンタさんの服がともミスマッチしており、一種のブラックユーモアを感じさせる。

『背教者ニコ○ス!？』

それを見てお嬢様と千桜さんが声を上げる。

「知ってるんですか!？」

「ああ！ 竿で出てくるクリスマスボスだ！ あのキ○トくんが死にかけた強敵だ！」

「ええ!? キリ○くんが!?」

あの○リトくんを追い詰めるなんて……！

「ど、どうするの!?」

「逃げなきゃ！ 逃げなきゃ！」

今なら西沢さんが“逃げなきゃ”と連呼していた気持ちがわかる。

これは、まずい。

「アーたん！」

「ハヤテ！」

一番小さいアーたんを抱っこ(※お姫様だっこ。主人公はお姫様だっこをすると通常よりもスピードが上がる)をして、走る。

「皆さん！ こっちです！」

「きゃー!?」

「ど、どうするのだあんなもの！」

「何かないの!? そのヒキオくんはどうやって倒したの!?」

「誰が引きこもりだ！ キ○トだキリ○！ 倒したってその戦闘シーンは全力」

「ああああああ!!!」

「どうしたの千桜!?」

「ナギ！ あれだ！ ○コラス倒すとGETできるアイテム！」

「それがどうし……ああああ！」

「どうしたんですの？」

「あの後ろの奴倒すと手に入るアイテムがあつて、それが“復活アイテム”なんだ！」

「だからきつとそれを使えば元の世界に戻る！」

『っ！』

た、たしかにその可能性は高い。
だけど――

「誰があれを倒すんですの？」

『……』

——こういう問題が残る。

「……僕がやります」

「ハヤテ!？」

「ハヤテくん!？」

「無茶だ!」

「だ、ダメだよ!」

「ハヤテ! ダメですわよ!」

皆からの制止の声がかかった。
だけど、僕は覚悟を決めた。

「僕はお嬢様の、そして皆さんの執事です。だから……皆
さんのためなら僕は戦えます」

「ハヤテ!」

「お嬢様。誰かがやらなければならないんです」

「ダメだ! そんなの」

「ナギ」

荒げるお嬢様を千桜さんが宥める。
ありがとうございます。千桜さん。

「……本気、なのです」

「うん」

「そうですか……。なら、私からはなにも。降ろしてくだ
さい」

「はい」

「ハヤテ——必ず、戻ってきなさい」

「わかったよ。アーたん」

そう言つて、アーたんは奥の部屋に入った。

「ハヤテくん」

「西沢さん」

「……私ね、ハヤテくんのこと、好きだよ」

「え」

「あ、いや、変な意味じゃなくて。これ、夢だけど、でも、
伝えなきゃいけないって、そう思つて」

「西沢さん……」

「つて、あはははは! ごめんね! 前にも言つたよね!
変なこと言つて」

「いえ」

「ごめん……え?」

「とても、嬉しいです。でも」

「……うん。大丈夫」

「すいません」

「ううん。じゃあ、頑張つてね。ハヤテくん」

西沢さんも、奥の部屋へと。

「ハヤテくん」

「ルカさん」

「なんだから、久しぶりに会ったっていうのに、大変な目に遭っちゃったね」

「そうですね」

「相変わらずついてないなー私」

「それを言ったら僕ですよ」

「そうだね。ハヤテくんが全面的についてない」

「えええ!? そこ肯定しちゃうんですか!？」

「え……? 自分がついてるとしても?」

「いや、思ってますんけど」

「ならいいじゃない」

「……」

「……ふふ。まるで昔みたい」

「……そうですね」

「……ねえ」

「はい」

「今度ね。ライブあるの」

「はい」

「だからね。今度、見に来て欲しいの。皆と」

「必ず」

「なら! ここからまず出ないとね!」

「はい。絶対にしましよう」

「任せたよ。ハヤテくん」

「お任せください。そのための執事です」

ルカさんも、奥の部屋へと。

「綾崎くん」

「千桜さん」

「ま、頑張れ」

「え? それだけですか」

「激励の言葉ならもうアイドルや旧友や小さいお姫様から貰ってるだろう? 不満があるのか?」

「い、いえ。不満とかじゃなくて」

「……はは。嘘だよ。と言つても、あまり気の利いた言葉は期待しないでくれよ?」

「はあ」

「君が死んだら意味がないから、それだけは覚えておいて

くれよ」

「……はい！」

「じゃ、ナギ。あとは任せた」

千桜さんも、奥の部屋へと。

「……」

「お嬢様」

「……」

「必ずお守りします。そして、皆さんを元の世界に戻して見せます」

「……」

「だから、皆さんと一緒に奥の部屋で待っていてください」

「……」

「それでは」

「ま、待て！」

「……お嬢様？」

「……………」

絶対に、生きて帰ってこい」

「……お嬢様。はい。必ず生きて帰って来ます」

「命令違反は許さんからな！絶対に、ぜーっつたいに許さんからな！」

「絶対に守ります」

「ふん。当然だ。だから……待ってる」

「はい！」

そしてお嬢様も、奥の部屋へ。

……。

後ろから破壊音が近づいてくる。

その出元である怪物を見据える。

「僕の名前は綾崎ハヤテ。ナギお嬢様の、そしてみんなの、執事だ!!!」

僕は怪物に向かって走り出す。

その勢い——ハヤテのごとく！

【三千院ナギがログアウトしました
水蓮寺ルカがログアウトしました
春風千桜がログアウトしました
アリスがログアウトしました
西沢歩がログアウトしました】

「……え？」

「あら」
「どうした？」
「これなにかしら」
「うん？……靴下？ 膨らんでる。何か入ってるな……こ、これは!？」
「どうしたのかな？」
「千桜ー。それなに？」

“還魂の○晶石”。ニ○ラスが落とすアイテムだ」
『なにiiiiiiiiiiii!!?』

「じゃ、じゃあすぐにハヤテくんを！」

「お、おい。光ってるぞ！」

「これもう発動するんじゃない!？」

「間に合いませんね」

「ハヤテ！ ハヤテーーーーー!!!」

「なんやったん伊澄さん。今のバケモンは」
「あれは夢の妖怪。眠っている人間を次々と自分の夢に取り込んで、食べてしまう恐ろしい妖怪」
「なんか前にもいたな……」
「ええ。そして取り込まれてしまうと……夢の中で背教者ニコラ○もどきと戦わされるといふ悪夢を見るの」
「随分と限定的な悪夢やなあ」
「あ、そうそう。咲夜」
「なんや？」
「メリークリスマス」

「ん？ メリークリスマス」

「……」

「……」

.....。

「え？ それだけ？」

「ええ。それだよ。じゃあ帰りましょう」

「いやそれだけで……いや待て！ 動くな！ つて、遅かった！ 伊澄さーん！ どこやー！ 伊澄さーん！」

—END—

それが彼らのクリスマス（ハヤテ×俺ガイル）

著者…羊田ペンタ

（注） この小説は第五回合同本の「やはり綾崎ハヤテの自称不幸は間違っている」の設定を一部引き継いでいます。

「ヒキタニくん、次は移動教室だよ？」

「……ん、ああ、わるいな」

呼び掛けられて目を覚ます。声をかけてくれたのはクラスメイトだ。いやヒキタニってやっぱり定着すんの？そんなに比企谷って言いづらい？今更どうでもいいか。

しかし寝ていたのに移動教室に置いていかれないというのは。

あれ？もしかしてこんなこと初めてなんじゃね？なんて思うことがこの高校に来てから多い気がする。っていうか多い、絶対。まあそれだけ多く当たり前のことを経験してこなかったということなのだろう。つまり俺は今まで小学生でもわかる常識を初めて学んでるってことか。

それはちよつといくらなんでも恥ずかしいなんて考えながら廊下に出る。文化祭が終わるといつのまにか冬になって、その廊下は少し冷えるはずだが、妙に暖かく感じた。



訂正。やっぱ寒いね、この時期は。いくらクラスメイトがほとんどいい人だからってね、マイナス要素が大きかったりするんだよ。精神的なやつね。

その名はクリスマス。

本来の意味合いなど忘れ去られているリア充が騒ぐだけのその日が、近付いているのだ。そりゃあいつら見てると寒くもなるっつーの。それに本来の意味忘れてるならわざわざクリスマスにまとまって騒ぐことないだろ。意味知らないなら普段と価値が変わらないはずじゃないのかよ。

「比企谷くんはクリスマス一緒に過ごす人いるのかい？」
「いると思うか？」

まるで世間話のように話しかけてきたのは春風。世間話なんてそうそうしないからよくわからんが。

自分で聞いたくせに春風は、「いや思えないね」なんて笑

いながら言ってきた。おいそこ納得するなよ。

春風に話を振られたのでくだらない思考は一旦やめた。そういう暇すぎてぼーっとしていたがバイト中だったんだ俺。忘れてたぜ。

「やっぱり家族と過ごすんだ？」

「それも無理なんだよなあ、多分」

「じゃあ君はアパートにいるんだな。恋人どころか家族とケーキも食べれないなんてクリぼっちを極めたいのか君は」

それ笑いながら言うことじゃないよねそれ？ いや真顔で言われるのはもつときついな。

いままでは家族でチキンやケーキなんかを食べてたが、今年はそうもいかない。家に帰るのも考えなかったというわけでもないが、たぶん親と気まづくなるだろう。俺家追い出されてるんだい一応。しかも小町受験生だし。あ、小町にも会えないのか。つらたん。

「いや、アパートにいるのもなんとなく気がひけるんだなこれが」

あのアパートに籠るのもいいが、あそこでもクリスマスパーティーとかやりそうなんだよな。そういう話を聞いたわけではないが、なんとなく、だ。だってあそこの住人そういうの好きそうだし。たぶん当たってるけど偏見が酷い俺。

もしパーティーがあつたとすれば参加してもなんだか微妙な空気を作り出してしまいうさだし、アパートにいるのに参加しなければそれはそれで「あいつノリ悪いな」となりその場にいらなくても空気悪くしそうだ。だからアパートにはいたくない。けど行く場所はない。これもう詰んでるんじゃないの？

「アパートでクリスマスパーティーする可能性だってあるだろ。参加して隅っこで黙ってるのもアレだし、アパートにいるくせに参加しないってのもアレだろ」

「あははは、やっぱり面白いな君は。でもみんないい人だし、そんなこと気にしなくてもいいと思うけどね」

「それだけ相手に気を遣わせるってことでもあるだろ？」
「そういう考え方もあるのか……」

一度会話が途切れる。春風は苦笑いしていたが、その後何か考え始めたように見える。眼鏡美少女が考えているとい

う構図。頭良さそうだ、ていう考え方が頭悪そう。

「そうだ、それならさ……」

考えるのは終わったようだ。これ話の流れからして俺のクリスマスは予定を考えてくれてたのか？申し訳ないな。

「……クリスマスは、私と過ごさないか？」

春風は真顔で言う。眼鏡がキラツと光った気がした。なにそれイケメン感溢れ出てるな。

………てそうじゃないだろ！

いやいやいやこれどういう展開だよ。なに？告白だと思っ
ていいのこれ？でも俺の知ってるパターンだと、本気にし
たら後から馬鹿にされるとかキモいって言われるとか周
りで仲間が見張っててOKした瞬間出てくるとかそんな
んしかないよ？ならここは「俺をネタにして遊ぶのやめて
くれよ」とか言うべきか？でもそこまで悪質なことをするよ
うなやつじゃないし、万が一これがガチだった場合、その
対応じゃ無駄に相手を傷つけるよな。となるとここはあの
名台詞で誤魔化すのが得策か………。

「……………な、なんだって……？」

春風は何も言っていないし、俺は何も聞いてない。ネタでも
ガチでもわざわざ二度繰り返すことはないだろうし、これ
で完璧。不自然に声を荒げたりもしてない。あ、でも不自
然に詰まっちゃったじゃん。

まあ大丈夫だろうと、そこで春風の反応を伺うと、

「……………ふっ、はははははははっ！」

めっちゃ笑われた。

「いやあ、今のそういう風に受け取っちゃった？ごめんご
めん。クリスマスもバイトしないかってことだよ」

ですよね〜。

いやでも顔とか明らかに狙ってやってたでしょ、さっきの
は。

「それにドギマギしながら悩んだ末に出た答えは難聴キ
ャラっていうのも……………くっ……………」

また笑いだす。

いやちよつともうやめて！ハチマンのライフはもうゼロよ！あたらしく黒歴史っぽいのが追加されちゃっただろ！今日布団の中で頭抱えて唸るの決定しただろ。むしろここがバイト先じゃなかったら今すぐ叫んでる。なんでガチな可能性があるとか考えたんだよ。無駄に傷付いたの俺じゃねえか。中学生に逆戻りかよ。でもあれだ。やられたことは昔と大差ないのに、ただからかわれたとしか感じないな。それだけの親密度はあるってことか？

あと笑うな。いくら暇だからってここでそんな笑うんじゃねえよ。ここじゃなくても笑うなよ。……もうやだ恥ずかしい引きこもりたい……………。



よく考えなくても、別にクリスマスパーティーをここでやるってのはただの予想だったな。とアパートの前に帰ってきて思う。いろいろと無駄だったなあ。の会話は。俺の新黒歴史とか。

「あ、おかえりなさい比企谷さん」

「……………うす」

玄関の戸を開け、中に入ると通りがかった綾崎と会う。わざわざ忙しいのに挨拶なんかしてくれて申し訳ない。あまりに申し訳ないから今後気付かれないようにミスディレクションしよう。気付かれないのは俺がリア充耐性低いつてだけでした。

冗談はさておき本当にこいつは忙しいんだろうな。多分。

「比企谷さん、クリスマスにアパートの皆さんでパーティーでもしようかと思うんですけどどうですか？」

唐突だな。つーか予想が当たりすぎて怖い。

忙しい中パーティーの企画とか忙しいなんてレベル越えてるだろ。そしてコミュニケーションをとるのが難しい俺にも声を掛けなきゃいけないなんて、そんなのあまりに申し訳ないから（以下略。まあそれでも今は返事くらいしておかないと。

「ん、まあ考えとく」

これだけ言っとけば大丈夫でしょ。これ言い続けてればそのうち本当に声が掛からなくなるまでである。ソースは俺。

だから今回もきつとそうだ。そのはずだ。……そうだよ
ね？

「予定がなければ是非、参加してみてくださいね」

「ああ」

くだらないことを考えてはいたが、正直なところまだこいつらとの接し方がわかってないだけだ。こっちに来てからしばらく経つというのに距離を掴めない。徐々に親密度を上げていき、踏み込んでくるならまだしも、最初から壁を作られないというのはほぼ初めてだ。もしかしてお前らATフィールド持っていないの？LCLの海に還るの？ってそうじゃなくてだな、つまり俺は心の壁を必要以上に侵略されるのになれていないから、適切で妥当な距離が欲しいってことだ。

まあこいつにその距離は期待できそうにないけどな。



「二三日は本当は休みだけどクリスマスイヴ前夜祭、二四と二五はみんな忙しいだろうってことで休み、ってことになってるから！間違えるんじゃないわよ！あと前夜祭は

自由参加だから！」

は？

学校のHRの時間であるが、ちよつとよくわからないこと言ってるよこの先生。

そんなのあるのかこの学校は。クリスマス忙しいって偉い人の集まりみたいなのもか？そのためにパーティーの日ずらしてるの？だいたいイヴだって前夜じゃないのかよ。クリスマス前夜前夜祭ってか。なるほどわからん。

まあなんにせよ俺には関係のない話だが。クリスマスは部屋に籠ることに決めた。バイトも遠慮することにした。やつぱりクリスマスには外に出たくない。他に理由がないこともないんだけどな。

「比企谷くん、結局クリスマスの予定は決まったのかい？」

「ああ。部屋に籠る」

隣の席の主である春風に問われた。それに応えるとニヤニヤしながらこう返してきた。

「そうか。じゃあ私はふられたんだな」

その話はやめてください、お願いします！まじで触れないでほしかった。俺なんか主人公の振る舞いするなんて思い上がり過ぎだったんだ。本当恥ずかしい。俺なんて穴掘って埋まっていたほうがマシですう……いや止めとこう。なんか隣の方が喜びそうなワードが入ってた気がする。腐ってそうだし。

それより引きこもる理由をちゃんと述べておこうか。勘違いが恥ずかし過ぎたんで引きこもります、って。いやそれは冗談だけどね？リアルヒッキーにもならないから。

「いやそれだったら、お前だってクリスマスパーティーに出れなくなるだろ。わざわざ俺のためにそこまでさせるのは申し訳ない」

「別にそれくらい気にしないんだけどね。それに多分バイト終わって帰ってもパーティーは終わらないと思ってたしね」

「まじかよ。それじゃあ意味ないじゃん。」

あれはなんのための会話だったのか。あ、俺をからかうためだけのものだったのか。やっぱり無駄アッ！でした。

「比企谷くんが家に籠るっていうなら私もバイトやめと

くよ」

今度はニヤニヤというより普通に笑いながら。そういうのやめろよ勘違いしちゃうだろ。もうからかわれてるだけってのはわかってるから大丈夫だけど。

「そこ二人、一応まだHR中なんだからイチャイチャするのはやめなさいよ」

「はい、すいませーん」

声が大きかったのか桂先生に注意を受けてしまった。返答したのは春風だ。

注意をされて、ふと思った。三馬鹿が便乗してうるさくなつたのも気にしない。

休み時間や放課後とかにいつまでもお喋りするのとはそんなに楽しいのか？今までもずっと持っていた疑問だ。というより否定のほうが強かった。

しかし今再び問いかければ、どう答えるか？そう、楽しいんだろ。そいつらにとっては。

バイト中に駄弁ったり、

その帰り道だったり、
そして今みたいに教室でだったり、

それらも同じようなものなんじゃないか。そうならもう否定することはできないのだろう。俺だってそれを拒絶することなく、いやむしろ楽しんでいたのかもしれないんだから。

まあ意固地にならなくてもいいかな、なんて思っている俺がいるってことか？それも悪くないかもしれないな。

暖房は点いているが、それ以上に、身体が温かくなった気がした。

いや待てよ春風。今更だがイチヤイチヤは否定しとけよ。
身体が熱くなったのも、そう言われた照れが原因なのかもしれない。小学生か俺は。



目が覚めればもう二四日の昼だ。イヴ前夜祭？行かねえよそんなもん。ゲームやって漫画読んでアニメ観て爆睡してたわ。超充実ライフでした。こっちに來てから初めても増えたが、無駄も増えた。イヴ前夜祭の話とか。

ただ今日は部屋に居ても多分連れだされる。昨日も一応声は掛かったんだけどね。今日はパーティーと言っても夜からだろうからそれまでは昨日と同じように快適な時間を楽しむとしよう。

今年は家族以外と過ごす初めてのクリスマスになるかもしれない。やはり俺はそれを嫌がっていなかった。

急に俺の部屋の戸が開いた。

「おいヒッキー、ゲームしようぜ」

「……お前はジャイアンか、剣野。あとノックしろよノック」

「そういえばノックは人類最大の発明って無敵先輩が言ってたな。いやあのときは真つ二つになるかと思った」

「怖えよ……」

おいのび太、野球しようぜってノリで入ってきやがった。最近はそのなに珍しいことでもない。あれか、俺の溢れ出るお兄ちゃんオーラのせいかな。つか真つ二つってなに？怖いよ？あと無敵先輩って鉄壁をあの持つてる人なの？なら確かに怖いな。

「それよりゲームって今日はなにやるんだよ？」

「一喰い行こうぜ！」

「なにその思いつきり。パクリなフレーズ……」

「即興で考えた」

一喰い、つてわからない人が聞くと、人食いに聞こえるからやめような。よくわかったな俺。

「まあそれで別にいいけど」

「とりあえずキュウビで実力を試そうか？」

「甘いな、マックスコーヒーより甘い。ぼっちイーターの腕を舐めるなよ。回復してくれる仲間がいなかったぶん一人でもマガツに勝てるんだよ」

NPCも連れて行けるといふぼっちに優しいゲームではあったが、NPC弱いんだよな。それで人数が多いと相手の体力も増えるから、そのうちぼっちプレイの方が効率いいって気付いた。逆にアドパとかは強すぎて怖いから無理。……なんの話だよ。

「じゃあメテオ系なしでサバイバル行こうか」

「どんだけ時間掛ける気だよ……」

「メテオの発明者は偉大だが、味気ないのも事実だとは思わないのか？」

「……………そうかもな」

そうして俺たちはしばらくゲームをしていた。メテオなしは辛いがラスリベをうまく使えばだいたい無敵だ。俺も無敵先輩になったぜ。あとスナイパーも俺の好みだな、ステルスとか。……………だからなんの話だよ。

だから俺たちはしばらくゲームをしていたんだよ。大事なこともないけど話の軌道修正のため二回言いました。いや通信とかも小町と以外にするのは初めてなんだが、これもなかなか悪くないんだ。対戦をしていれば嵌め技ずるい！だのせこい！だの嫌味を言い合ったり、協力プレイならアイテム使って妨害し合いミスすれば、貧弱！貧弱ウ！など馬鹿にし合ったりもした。俺の言葉で表すと悪くないようには全く見えないカオスなんだが。……………まあ、なんだ。だから誰かとゲームつてのも悪くないよな。二回言っただけで特に意味はない、多分。

「そろそろみんな集まってるかもしれない」

唐突に剣野のは話を変えてきた。俺はそれを聞いて時計を見る。もうそんなに時間が経ったのか。まあサバイバル全部メテオなしでやれば当然か。

「んで？もうそっち行こうぜ、ってか？」

「……………!？」

「いや俺が集団の内に入ろうとしてるのが珍しいからって、そんな顔するほどでもないよね？」

どんだけ驚いてるんだよ。俺もうっかりマイ珍百景にセルフで登録しちゃうところだったけど。こいつ絶対俺はノッてこないと思ってただろ。もしかすると綾崎とかに俺を連れてくるように頼まれてたから、嫌がることを前提としてたのかもしれないな。

「……………なんでもない。そうだな、行こうか。」

俺たちは廊下に出て居間からリビングかダイニングかもよくわからない謎の部屋に向かう。居間もリビングも同じじやねえか。つーか今更だが俺の部屋に女子がいたんだな。超自然だったんだけど。慣れって怖いわ。

居間か(以下略)の部屋に来て戸を開く。するとそこでは…

……

「ハンドと吹っ飛び率とか最大にして対戦したときのソニックの強さは異常なのだ！」

「ウルフも負けてないぞ！」

「あら、ルカリオの必殺技も便利ですわよ？」

「やっぱりガノンドロフじゃ勝てないのかな!？」

スマブラやってるし!もつとパーティーの準備とかでせわしないかんじ想像してたわ!てかマリアさん強いな。ルカリオの鈍い動きでソニックの攻撃避けるとかすげえ。防御?回避?コンピュータ相手じゃ必要なかったから俺は使ったことない。

「おい剣野、これでいいのか？」

「さ、さあ?どうなんだ？」

マリアさんここにいるってことは、綾崎一人で準備してんの?大変だな。しかし台所?キッチン?のほうを見ると、手伝いはちゃんというようだった。

「ハヤテくん、これもう運んじやっていいかしら？」

無敵先輩もとい絶壁先輩が手伝ってるようだった。別に先輩じゃないけど。……………今、睨まれたのは気のせいだと思いたいね。

気づけば二人だけで準備をサクサクとと終わらせてしまったようだ。速い！やはり通常の三倍何が速い！いやもうこれ三倍どころじゃねえ！なにこれ。

「お嬢様ー、準備終わりましたよ！」

「ちょうどテンション上がって来たところだから後にしよう」

「そんなこと言っていないでなんか音頭とってくださいよ。」

一応主催者なんですから、一応」

「うるさいなあ。わかったよ、やればいいんだろ？」

あいつが主催者だったのか、一応。ずっとスマブラやってたけど。綾崎も一応って二回言ってるし。

「では始めるぞ。んんー、えー皆様本日は第一回ムラサキノヤカタ

クリスマスパーティー兼マリア誕生日(仮)パーティーを開催します。各々、勝手に楽しんでください」

「……………」

超真顔。超棒読み。お前それでも本当に主催者かよ。おい、誰かこの事態を收拾しなくていいの？

「えっと、マリアさん。誕生日プレゼント用意したんですけど、どうぞ！」

「あら。ありがとうございますハヤテくん」

私も私もと次々にプレゼントを渡してるようだった。なにこれ聞いてねえよ。俺だけなんも用意してないじゃん。まあしょうがないか。

んで、この後どーなの？

「よしお前らゲームを続けるぞ！あ、ご飯も勝手に食ってくれ。千桜とカユラと、あとついでに比企谷もやるぞ」

「ついでかよ。じゃあ他でいいだろ」

「ま、いいじゃないか比企谷くん。コンピューターとやるのとはまた違って面白いよ」

「……………わかったよ」

なんだかんだでそんなかんじのクリスマスパーティーが

形成されていった。やっぱりもうこれ平日と変わらないんじゃないの？クリスマスであるという意味がないじゃん。

「比企谷なんで防御使わなくせに強いんだよ！」

「ゼルダの必殺技で充分だろ」

「飛び道具も直接攻撃も効かないのか」

「くっ………よくもピクミンを……」

これが俺たちのクリスマスパーティー？まあ悪くないかな。



「そういえばお前、おじいさんのところ行かなくていいのか？」

「そういえばそうですね。去年はパーティーが暇だからって抜け出してたんですっけ」

三千院って金持ちなのか？いやこんな土地持つてるんだからそれなりだとは思ってたが。

「ん、ああ。今年はじじいに来てもらうことにした。……：そうだな、そろそろクリスマスとしてあれだからプレゼントを出すか。よし！サンタクロースのじじい！出て来るのだ！」

「なんでワシがこんなことをしなければならんのじゃ！」

そこで登場したのは、なんか目付き悪いかんじのサンタ服着たじいさん。なんかプレゼント入ってそうな箱をいっぱい持ってきた。

「札を言うぞ、じじい。プレゼント置いたら用ないから帰っていいけど」

「なんで呼ばれたのワシ！？」

誰だか知らんがなんかただの不憫なじいさんっぽい。このじいさんが金持ちだったりするの？こんなアホっぽいのに？

「よし、もう帰れ！」

「マリアあ、孫娘がワシをいじめる！ちよ、老人をこの寒い中外に追い出すなよ……おい！………」

「……………」

「ナ、ナギ。やり過ぎじゃありません？」

結局、三千院が追い出した。いやなんだったの今の？必要あった？ないよね。

「で、では気を取り直して。お前ら、このサンタクロースからのプレゼント一人一つ好きなものを持っていけ！」

このパーティーの企画、絶対迷走してるよね。多分千葉のどっかの高校二つが合同でやったイベントのほうがもうちよつとしつかりしてる。

三千院以外がなんとも言えない空気を醸し出していると

『ピンポーン！』

客人が来客して来たようだ。もうこの二重表現意味わかんねえな。

「あ、ちよつと僕が出ますね」

今のはこの空気からの逃げという意味が含まれているよな。つーかクリスマススイブのこの時間に来るやつっておかしくないか？時計を見ると現在日付を跨ぐ前です。あれれ、スマブラやってからの記憶がないや。

綾崎は部屋の戸を開けようとしたが、その前に戸が開いた。

「やつほー！仕事終わったから来ちゃった！」

全員が驚いていると思う。

いやいつ入って来たんだよ。玄関開ける音とか廊下を歩く音とか聞こえなかったよ？もしかして俺以上に忍べるの？それに鍵閉めてないとか無用心だな……………つてそうじゃないだろ！アイドルじゃん！水蓮寺ルカじゃん！なんでこんなとこに来るの！？…………ちよつとびつくりしただけで別にアイドルなんか好きじゃないんだからねっ！

「おおー！久しぶりだなルカ！」

三千院その他住民たちも水蓮寺とワイワイ楽しくおしゃべり始めた。

なんでいるかって、普通に考えてここの人たちと知り合い

だったただだよな。アイドルと知り合い人がいるアパートに住んでるってこれ地味にすぎえな。たまに生で見れるかも。

うん？アイドル？……はっ！

雪歩誕生日おめでとおおおおおおおおつ！

ふう……。今日中に言えて良かった。いくら俺が愚民だからって一人のPとしてこれくらい言っておかないと。この場で叫ぶわけにもいらないから心の中だけでも。この水蓮寺ルカ来訪によってか空気は戻ったようだ。

「ねえナギ。このプレゼントっぽい箱たちはなんなの？」

「それはサンタからのプレゼントってことになってる。一人一つ好きなもの持っていけ」

「ありがとー！じゃあ私もらっちゃうね」

私も私もー、とプレゼントに群がる住民たち。さっきはシンとしたが、空気が違えばこうも変わるのか。

「比企谷くんはいらないのかい？」

「いやプレゼント貰えるなら貰つとくさ。ただ女子が多い

からうつかり触れて通報されたら困るだろ」

「相変わらずだな、君は」

春風にいつもの捻くれで返す。俺だって真面目にそんなこと考えてるわけではないがな。ただ女子が多い中に入り込んで行ったら気不味い雰囲気は作っちゃうかな、とは思ってるくらいだ。俺も随分と女子耐性が高くなったもんだな。

「そういえば、この前言ってたこと実現出来たね」

「はあ？なんの話だ？」

「ほらアレだよ。クリスマスは一緒に過ごそうって言ったじゃないか」

不覚にもだが、再びドキとした。

今度はただのからかいだともうわかっているのだが、一般的に見れば美少女なのだ。属性にすれば多分クールとかそんなかんじ。そんな美少女に割と真顔っぽい顔で意識させられるようなことを言われたら、うつかり惚れちゃいそうになるだろ。俺ほどに頑丈な予防線を張っていても気を抜くところなるのだ。男って単純だな。

俺の顔はやはり赤いのだろう。春風もニヤニヤしていると

も、微笑んでいるとも言えるような顔で笑っている。やっぱり俺に女子耐性はなかった。

「あつれ〜？なんかそこの二人良い雰囲気じゃない？っていうかその人だれなの千桜？」

「秋くらいからここに住んでるんだよ。比企谷くん自己紹介でもしたら？」

なんだよ、お前俺の保護者かよ。という意味を込めて軽く睨みつけると、やはり春風は微笑んでいた。

「あー、えつと比企谷八幡です……」

「わたしは水蓮寺ルカ。それでもアイドルやってるんだ！よろしくね！」

「あ、はい」

なんか自分の親とその知り合いに挟まれた子供みたいな反応になってねえかこれ。

「やっぱ千桜と話してるときとは、反応が違うね。ねえねえ！もしかして二人は恋人同士になってたりするの？」

「いやねえよ」

「おお、こんなときだけ反応が速い！」

「比企谷くんはそんなに私付き合ってることにされるのが嫌なのかい？」

こいつ……涙目の上目遣いとは…

「…………お前それもし素でやってるなら綾崎並みにモテるだろ…」

「それはどっちもないって」

「あはは、比企谷くん顔真っ赤だね！おもしろ〜い」

そうして俺はしばらく弄られ続けた。クラスに一人はいじられキャラがいる理由がなんとなくわかったような気がしないでもない。



クリスマスとは結局なんだったんだろうか。キリストの誕生日というだけのはずだ。そしてその意味も知らずただリア充が騒ぐ日だと思っていた。

そうだと思っていたが、やはり疑問だった。今日はクリスマスパーティーというものに俺も参加したが、ただの日常

的にありそうな風景だったただけだ。まあちよつと料理は豪華だったかもしれないし、そもそも俺は日常に参加していなかったわけだが。

ふと思った。言葉の意味を理解する必要があるのだろうか、と。例えばリア充という言葉のように捉え方の多い言葉はたくさんある。それと似たようにクリスマスも様々な捉え方があってもいいのではないか。クリスマスは本来キリスト誕生日だが、正しさが常に正義というわけではない。自分だけにとつて何か意味を持つこともあつていいはずだ。その強要はあまり良いとは思えないが。

そこで、俺にとつてのクリスマスとは……日常なのだろう。

ここまでもったいぶってそれかとも思うが、やはりそれしかない。クリスマスという名に囚われずそれが常にあるものとなつてもいいと思った。

今日のように悪くない、いや、楽しいと思える日が日常になればいいとそう考えたのかもしれない。

クリスマス・キャロル

著者…ロッキー・ラックーン

【まえがき】

今回は漫画『ARIA』の世界でのお話を作りました。作品中に使われている用語がこのSSでも出てきますので、前もっていくつかご紹介します。

「アリス・キャロル」…今回の主人公。『ARIA』のキャラクター。14歳。「でつかい●●です」が口癖。きゃわいい。無口で無愛想で人付き合いは非常に苦手。学生でありながら天才的な操舵術を持っていた事で、オレンジぶらねつとからスカウトされ、入社した経緯を持つ。続きは本編で。

「ウンディーネ」…ゴンドラと呼ばれる舟で町の観光案内を行う女性の職業。三つの階層があり、低い方から「見習い（ペア）」・「半人前（シングル）」・「一人前（プリマ）」となる。本作の主役のアリス・キャロルちゃんは見習い（ペア）に該当する。一人前（プリマ）になると「通り名」が与えられ、それを看板に営業をしていく事となる。

「オレンジぶらねつと」…アリスちゃんが所属するウンディーネの会社（＝水先案内店）。アリスちゃんの先輩のアテナ・グロリーイさんは「水の三大妖精」の一人として称えられる業界トップクラスのウンディーネ。アリスちゃんのセリフに出てくる「灯里先輩・藍華先輩」は別の会社に所属する友達。

「月刊ウンディーネ」…アイドル的職業であるウンディーネの特集雑誌。インタビューやコラム、占いから漫画まで内容は多岐に渡っている。この世界のヒナギクはこれを定期購読契約するほど気に入っている、という設定。アリスちゃんは異例の採用という事で注目を浴び、特集記事が組まれた事がある。

※ハヤテとヒナギクの仲

掲示板にて連載中の「しあわせの花 Cuties」の設定のままで。付き合っているようですが、今回は特にこの設定に意味はありません。アリスちゃんを連れてゴンドラでの観光を楽しもうとオレンジぶらねつとを訪れます。

たくさん書いてしまいましたが、サーっとフィーリングで読んで頂ければと思います。

それではどーぞ！

こんにちは。「ハヤテのごとく！」読者の皆さんにはどうかはじめましての方が多と思いますので、自己紹介をさせてもらいます。

私はアリス・キャロル、歳は14歳です。ミドルスクール（中学校）の学生をしながら、「オレンジぶらねっと」の見習い（ペア）ウンディーネとして、日々一人前（プリマ）に向かつてでっかい頑張っています。今日はクリスマス、社員寮の同室の一人前（プリマ）のアテナ先輩のサポートの仕事ででっかい大忙しです。

今は、ようやく午前中の予約が終わってお昼休みです。私は昼食を急いで取って、午後の予約までの残りの時間を自分のゴンドラの練習に費やそうと、会社の船着場に一人で

向かっている所でした。のですが…

「アレ…？」

「……」

私のゴンドラに見慣れない人影が…。幼稚園児くらいに見た目の小さい女の子です。眩しいくらいのお金髪に、特徴的な縦ロールが印象的で、どこかの国のお姫様というような感じの高貴な雰囲気のお子様です。ゴンドラのお客様用の椅子に我が物顔で座っています。とりあえず、私のゴンドラなのでひと声かけてみようと思います。

「ちよつと…」

「はい？」

「どちら様ですか？」

「人に尋ねる前に、自分から名乗るのが礼儀ではなくて？」

「ムムム…でっかい生意気なちっこい子ですね」

人の物に無断で乗り込んでる上に、なんかでっかい偉そうな態度の子供です。…でも、私は藍華先輩と違ってオトナなので、喚き散らしたりしないで冷静に対応しようと思います。

「私はアリス・キャロル、オレンジぷらねつとのウンディーネです。このゴンドラはでっかい私の物なんですが」

「そうでしたか、それは失礼しました。アリス・キャロルさん…ヒナの持っていた月刊ウンディーネで見た事がありますわ」

私の対応の仕方が良かったのか、女の子のでっかい生意気な態度が薄れ、どこか安心したような感じさえ受け取れました。

それにしても、ちよつと前に雑誌で特集を組まれた事がありますが、こんな小さな子にまで名前を知られているとは…でっかい驚きです。

「それにしても素敵なお名前ですわね。どんな花よりも気高く、どんな宝石よりも無垢で、一点の穢れも無い、至高の美しさを持った究極の少女の名前ですわ」

「それはありがとうございます。で、そーゆーあなたはどちら様なんですか？」

名前を褒められたのは本心なのか皮肉なのか分かりませんが、練習がしなかった私は無意識のうちに受け答えが雑になっていたかもしれないです。

「奇遇ですわね、私もアリスといいますの。同じ名前どうし、どうぞよしなに」

「はあ…」

名前の件は多分本心からのものだったと分かりましたが、それはどうでも良い事でした。見る見るうちに経ってしまふ時間に、でっかいイライラしています。

「で、アリスさんはどうして私のゴンドラに乗り込んでいるんでしょうか？」

「それが…今日の午後から私の『パパ』と『ママ』がアテナさんのゴンドラの予約を取っていますの。そこに私も一緒に乗る予定になってますが、たまには夫婦水入らずで楽しんで欲しいと思います…。ここで『オレンジぷらねっと』の人が来るのを待ってましたの」

「で、待っていたのが偶然私のゴンドラだったと」

「ええ」

予約のお客様のお子さんでしたか。そうすると少し話は違

ってきますね。（会社のゴンドラに無断で乗り込むのは、お客様であつてもでっかいルール違反ではありますが、子供のした事なので目を瞑ります）

「それで急なお願いで申し訳無いのですが、アテナさんの観光案内の間、この私を預かってくれる人を探して欲しいのですわ」

「なるほど…」

灯里先輩だったら二つ返事で「任せて！」と言いそうな案件ですね。ただ、今日は忙しいクリスマス。灯里先輩も藍華先輩も、アリシアさんや晃さんのお供で、でっかいお仕事中です。私もアテナ先輩のお供ではありますが…このアリスさんの親御さん——たしか綾崎さんと言いましたね——の予約の間だけ、この子を預かる事は出来なくもないです。ただ、私に小さい子供の世話が出来るかと言われると…でっかいでっかい不安です。

「ご迷惑でしたら他の方にお尋ねしますわ、勝手にゴンドラに乗り込んで申し訳ありませんでした」

「いいですよっ！」

「ん？…と言いますと？」

「私がアリスさんのお世話をします。実は私、アテナ先輩の一番弟子で、綾崎様のご予約でもお供する予定でしたが…そーゆー理由であればアテナ先輩もきつと許してくれます」

「え…！よろしいのですか？」

「でっかいお任せです！」

勢いに任せて言ってしまいましたが、これは私が立派な一人前（プリマ）になるためのひとつのでっかい試練なのです。お客様の中にはいろんな事情を持つ人がいて、たとえ子供であっても出来る限りそのリクエストに応えてあげねばなりません。決して子供の相手は得意じゃありません

が、私の中の新しい自分——ネオアリスが、このチャンスを逃してはならないと訴えてきているのです！

「ありがとうございます、アリスさん。やはり『アリス』に悪い人無しですわね♪」

「早速ですが、もうそろそろ親御さんたちのご予約の時間です。アテナ先輩にアリスさんの事情も説明しなくちゃなので一緒に来てください！」

「はい、お願いしますわね」

差し出された小さな小さな手を握って、会社のロビーへと案内します。普段は先輩たちに引つ張られる私ですけど、今日は私がお姉ちゃん。でっかい張り切っちゃうのです！



「という訳なのですが、アテナ先輩…」

「うん、いいわよお♪」

「え、即答なんですか!？」

先ほどの件をアテナ先輩に説明したところ、何の躊躇いもなくOKを頂けちゃいました。最終的にはOKを貰えるとは思ってましたが…ここまで何の質問とも無いとなるのは正直なところ意外でした。

「もちろん。アリスちゃんがこっちの…小さいアリスちゃんのパパとママを想う気持ちに応えたいっていうのが分かったから。小さいアリスちゃんも、パパとママの事が大好きなのね」

「ええ、それはもう!」

「なら、私は全然大丈夫よ。ただ、パパとママにはこの事をちゃんとは伝えないとね?」

「それはもちろんですね。アテナさん、ありがとうございます!」

流石はアテナ先輩。ちっちゃい子供の扱いはでっかい手馴れたものです。アリスさんの頭を優しく撫でる姿は、まるで姉妹のようです。

「でっかいよかったですね、アリスさん」

「アリスさんも、ありがとうございます。あなたにお願いして良かったですわ!」

「……」

「どうかしましたか?」

上手く言葉に出来ませんが…でっかいでっかい嬉しいです。

自分のした事で、相手が喜んでくれている笑顔が見られるのがこんなに嬉しいだなんて…ネオアリスの第一の大発見です。

「いえ、では親御さんにもこの事をお知らせしに行きましよう。今はどちらにいらっしやますか？」

「探す必要はありませんわ。もう間もなく…」

と言いながら出入り口の方へとアリスさんが視線をやる
と…

「アリス！」「アーたん！」

「ホラ、やって来ましたわ♪」

とてもお若いご夫婦（ぶっちゃけ子供がいるようにはとても見えないほど…というか灯里先輩たちと同世代（16〜17歳位））に見えますけど…でも灯里先輩と同じ年だったらアリスさんは10歳くらいの時に生まれた子供になるし…でっかい年齢不詳です）が仲良くご来店。アリスさんの姿を見るや、急いで駆け寄っていきました。



「という訳で、今回はお二人で行ってらっしゃいという事になりますわ」

「でも、それだとアリスさんにご迷惑が…」

心配そうに私の方へ視線をむけるアリスさんのお母さん。ここは、私からの押しもでっかい重要になる場面という事ですね。

「そんなこと無いです！アリスさんは、もう私のでっかいお友達です。お友達と一緒にいて迷惑だなんて思う人はいませんよね？私もアリスさんと短い間ですが一緒にいたいので…よろしくお願いします！」

「…そこまで言われちゃうと、こちらからもお願いせざるを得ないわね、ハヤテ？」

「…そうですね。ではアリスさん、アーたんの事よろしくお願いしますね！」

私からの説得に、親御さんも安心してくれたようです。

「はい！でっかいお任せください!!」

「アリスも、あんまりアリスさんにご迷惑かけちゃダメよ?」

「もちろんですわ、あなたたちもあんまりイチャイチャしすぎてアテナさんを困らせないように、ですわ♪」

「「…えっ（ッホ）」

「フフフっ、私は大丈夫ですので、好きなだけラブラブして下さいな♪」

アリスさんの言葉に、お二人は顔を赤らめています。でっかい新婚さんっぽいです。

「んもう、アリスったら!…あ、それとアリスさん。後でコレにサイン頂いてもよろしいかしら？」

「えっ!?私がですか？」

「ヒナはウンディーネ通で、今日は『オレンジぷらねっと』関連のものをたくさん持ってきているのですわ」

アリスさんのお母さんが掲げるのは、私の特集が組まれた月刊ウンディーネ（結構昔のヤツなのになんで今持っているんでしょうか？）です。まあ、サインを頼まれたらもう断る事はありませんが…。

とりあえず、親御さんの説得もバッチリ上手く行きましたのででっかい安心です。



「じゃあ行ってくるわね、アリス！」

「行ってきますアーたん！」

「行つてらっしゃーい」

「行つてらっしゃいませ、ごゆっくりお楽しみください！」

「では、出発しまーす！」

アリスさんの親御さんたちを乗せたゴンドラの出発です。アテナ先輩がテンポ良くオールを漕ぎ出しすと、見る見るうちにゴンドラは沖の方へ。

アリスさんは、親御さんの姿が見えなくなるまで手を振り続けていました。

「さて、これからどうしましょうか？」

「えっと…ひとつ、聞いて欲しいお話があります」

「ん、为什么呢？」

お見送りもひと段落して、この後の事について話し始めると、アリスさんはもじもじと照れ臭そうに切り出しました。

「アリスさん、実は私も…ゴンドラに興味がありました…」

「そうなんですか！」

「で、もし良かったらなんですが…アリスさんのゴンドラに、乗せて頂きたいなど…」

「!!」

なるほど。親御さんのためと言っではいたものの、やっぱりアテナさんのゴンドラに乗りたかったんですね。乗せてあげたいのはどうかいややまですが…見習い（ペア）の私にはお客様を乗せて漕ぐ事が許されていません。そこはなんとか理解して貰わないと…。

「ごめんなさい。今の私は見習いなので、お客様を乗せて一人でゴンドラを漕ぐ事が出来ないのです。ゴンドラはありますが、練習のためのものになってますので…」

「そうですか…すみません、ワガママを言ってしまったて…」

「いえ、こちらこそ…私がでっかい一人前だったら…」

と言いながらも、私は色々他の案を考えていました。

そういえば、灯里先輩はよく晁さんやアイちゃんを乗せて練習をしていましたね。あれは「お友達」にお客様役として自分の操舵や観光案内の練習に付き合ってもらおうという体でしたね。

それなら、水先案内業界の規則としてもでっかい大丈夫だったと覚えてます。

よおし…!!

「でも…」

「？」

「アリスさんが私のお友達になってくれたら…私の練習にお客様役として付き合って欲しいのですが…」

「え…!!」

私の言葉に、アリスさんの顔がにわかに晴れて行きました。初めて、でっかい年相応の表情を見せてもらったと思います。

「アリスさん」

「…なんででしょう？」

「お客様を乗せる事は出来ませんが、お友達に自分のゴンドラの乗り心地を見てもらうのは、でっかいルール違反になりません。…お友達としてで、いかがでしょうか？」

「もう、私たちはお友達同士なんですから、他人行儀な呼び方はやめましょう。私の事は『アーたん』と呼んでくださいな。私からは『お姉さま』と呼ばせて頂きたいのですが…」

「さっき…アリスさんがハヤテとヒナに私の事を『お友達』って言ってくれた時、とっても嬉しかったですわ！こちらこそ喜んで♪」

「良かった…では、準備をしてるので待っててください」

「ええ♪」

こうして、私に新しいお友達が出来ました。早速ゴンドラの準備をするためにオールを取りに行こうとした所、アリスさんが私の制服の裾を掴んで止めました。

さっきと同じようにもじもじと照れ臭そうに提案してくれるアリスさん。学校以外でこうして友達ができるなんて灯里先輩たち以来ででっかい嬉しいです。でも、「お姉さま」という呼び方はちよつとイヤですね…。

「でっかい却下です！」

「!？」

私の答えに、アリスさんの顔はとても寂しそうになりました。そーゆー意味では無いんですよ。

「すみません、少々馴れ馴れしすぎでしたわね…」

「でっかい違います。『お姉さま』じゃなくて『お姉ちゃん』です。アーたん！」

「お姉さま」という言葉にも他人行儀な気分がしたので「お姉ちゃん」です。私からの提案にアリス…ではなくて、アーたんは少しためらいながらも嬉しそうに微笑みます。

「お姉ちゃん…？」

「なんですか、アーたん？」

「…お姉ちゃん！」

「アーたん！」

「お姉ちゃん!!お姉ちゃん!!」

「アーたん!!アーたん!!」

特に意味の無いやり取りでしたが、でっかいでっかい嬉しい気分になりました。





「すごい：すごいですわ！お姉ちゃんゴンドラ漕ぐの、とってもお上手なのですね！他のペア（見習い）の人でもこんなに上手いものなのですか？」

場面は変わって、私のゴンドラにアーたんを乗せています。普段以上にでっかい張り切って漕いでいます。

「フッフ：他の人にはこんな風に言う事は絶対にありませんが実は私、操舵技術にはでっかい自信があります。周りの皆からは、一人前（プリマ）と同じレベルだと評されていたりもします」

「それはそれは…」

私の言葉に、アーたんも誇らしげに私の顔を見上げてきます。ただ、今の言葉は事実ではありますがそれに満足するなどという事は決してありません。

「ただ、私はまだまだでっかい未熟者です。接客する時なんかは声が小さかったり、舟謳（カンツォーネ）ゴンドラ観光の際に漕ぎ手が客に披露する歌）は恥ずかしくて聞いてもらってる人と目が合わせられません。操舵だって自信があると云っても、アテナ先輩たち水の三大妖精や私の目標である伝説の大妖精グランドマザーに比べたら、お子ちゃまの遊びレベルだと分かってます」

「お姉ちゃん…」

「だから、もつともつと精進あるのみなんです！アーたんにも、私が一人前（プリマ）に少しでも近づけるように協力をして欲しかったりします」

そう、アーたんを乗せてあげたいというのも本心でしたが、私自身の成長のために誰かに乗って欲しいというのも実はあつたりしたのです。私のお願いに、アーたんも笑顔で応えてくれます。

「なるほど：つまり、私はお客の目線に立って忌憚の無い

意見を述べれば良いというわけですね？」

「でっかいその通りです！」

「分かりました。お姉ちゃんが一人前（プリマ）になれるよう、私も微力ながら協力させて頂きますわ！」

こうして、でっかい奇妙なトレーニングが始まったのです。



「接客の基本は『なりきる』事ですわ」

『『なりきる』…ですか？』

「ええ、あなたがお客様だとして『自分だったらこういう

人の舟に乗りたくない』と思うウンディーネの姿を演じるのです。接客業は役者と同じなのですわ！」

「役者…」

そんな考え方、初めて聞きました。確かに、自分の理想とする姿を描いてそれに近づこうとする工程は役者さんに似ていると思います。私が理想とする姿…。

考えにふけてしまいそうになる私に、アーたんはさらにアドバイスをくれます。

「理想像も大事ではありますが、例えば身近なアテナさんだとか、目標とする伝説のグランドマザーだとかがどんな事をしているのかを知るのも大事ですわね。自分の引き出しを出来るだけ増やして、その中から良いと思ったものを選んで実践すれば、お姉ちゃんは水の三大妖精とグランドマザーの良いトコ取りという姿にもなれる可能性があるという事です」

「なるほど…ていうか、アーたんは6歳ですよね？でっか

いでつかい博識です」

「うふふ。悩める子羊さんに道を示すのは得意なのですわ
♪」

得意そうな笑顔で私を見つめるアーたんは、とても6歳には見えないほどでつかい大人びていたのです。



「お姉ちゃん、歌うのは好きですか？」

「えっ？」

接客の次は舟謳（カンツォーネ）です。誰もいない所で歌う私の姿にアーたんが発した一言目がコレでした。

「お姉ちゃんの歌からは『上手く歌わない』という思いが一番最初に伝わってきますわね」

「…でつかい図星です」

「天上の謳声（セイレーン＝アテナさんの通り名）とまで呼ばれているアテナさんが身近にいる事で、無意識のうちに上手く歌う事に気持ちが行きすぎてしまっているのではないかと思います。まずは、歌っている自分と向き合う事から始めてみると良いかと思いますわ」

「歌っている自分、ですか…」

「ええ。歌うのが好きなだけで、それが嵩じてアルバムを3枚も出した女子高生がいるくらいです。お姉ちゃんもきつと大丈夫ですわ♪」

歌うのは…小さい頃からずっと大好きでした。でも、ウンディーネになって舟謳の練習をするようになってから…

いつもいつも、「上手く歌うように頑張らないと」と、辛い気持ちの方が大きくなっていったような気がします。

♪

と、思いつめているとでっかい素敵な歌声が聞こえて来ました。クリスマスの時期になると良く耳にする、子供の頃から歌いなれているあの歌です。

「アーたん…でっかい素敵な歌です」

「実は私も、歌うのは大好きで…『ママ』とはしょっちゅう一緒にカラオケに行く仲なのですわ♪お姉ちゃんも一緒に、さあ！」

「はい！」

♪

二人で歌っているこの瞬間、私は昔の自分——歌うのが好きで好きで仕方なかったあの頃を思い出しました。でっかいでっかい楽しいひと時でした。何か、大切な事が分かったような気がします。

◆ED-side オレンジぷらねっとー

「アテナ先輩！」

「ん、なあにアリスちゃん？」

アーたんたちご家族を見送った後、私はいてもたってもいられなくなりました。でっかい燃えています。

「私、これからもっともっと頑張つて、でっかいでっかい立派な一人前（プリマ）になります！」

「あらあ、どうしたの急に？」

「アーたんと約束したんです。必ず一人前（プリマ）になつて、私の漕ぐゴンドラに乗せてあげるって…」

「そうなの。アリスちゃんならきつとなれるわ。私が保証する！」

「ありがとうございます。…という訳で、今後ともご指導の程でつかいよろしくお願いします」

「うん、こちらこそ♪」

今年のクリスマスは新しい友達が出来て、大切な気持ちを芽生えさせてくれました。サンタクロースのようなでっかい摩訶不思議な子、アーたん。今度会う時は、もっともつと素敵なウンディーネになった姿を見せてあげるのです！

アリス・キャロル、でっかい頑張ります！

◆ED-side 綾崎家（仮）-

「で、『二人つきり（強調）』でのアテナさんのゴンドラはいかがでしたか？」

「んもうすつごい良かったよ、アーたん！」

「そうよそうよ、評判どおり船謳（カンツオーネ）なんて特に素敵で。天上の謳声（セイレーン）の二つ名に相応しかったわ！ん、来て良かったわ！」

こんにちは、アリスでございます。オレンジぷらねつとからの帰り道、ヒナとハヤテで私を挟んで3人仲良く手を繋いで歩いていきます。

私の皮肉の言葉もなんのその、バカップルのお二人は各々の感想を述べるだけです。でも、アテナさんのゴンドラを

楽しんで貰えたようで、それは何よりですわね。

「でも、やっぱりアリスも一緒に乗れば良かったのに…」

「そうですわね、次の機会には…」

ヒナの言葉に返そうとした瞬間、とても良い事を思いついてしまいました。

「いえ、そのまた次の機会になってしまいかもしれませんわね」

「c.c.」

「今度来る時には、黄昏の姫君（オレンジプリンセス）のゴンドラを予約しておりますので」

「黄昏の姫君（オレンジプリンセス）…？ヒナ、聞いたことある？」

「ううん、月刊ウンディーネでも見た事が無い通り名ね。アリス・キャロルさんは天才って言われててもまだ見習い（ペア）で通り名は無いし…。私たちが出かけてる間にオレンジぷらねっとの新しい一人前（プリマ）をアリスさんに紹介された、とかかしら？」

「フフツ、その時が来れば分かりますわよ」

そりゃあウンディーネ通のヒナでも知らない通り名ですわ。ついさっき私が考えたお姉ちゃんの通り名なのですから。

黄昏の姫君（オレンジプリンセス）…我ながら良いネーミングですわ。アテナさんに採用してもらえよう連絡してみるのがアリですわね。

きつと、お姉ちゃんなら素敵な素敵な…でつかいウンディーネになれますわよ。私も応援していますわ！

「ヒナ、ハヤテ…。また、一緒に行きましょうね♪」

「うん！」

今年のクリスマスは（と言っても記憶が無いからクリスマスなんて初めてですが）プレゼントをあげようとしたつもりが、私の方が素敵なプレゼントを頂いてしまいましたわね。他人に優しくしようとする気持ちめぐり巡って自分にまでかえって来る、素敵なクリスマスの魔法ですわね。
：なーんて恥ずかしいセリフが浮かんでくるのもクリスマス
マスのせいですわ！

お姉ちゃんの一人前（プリマ）の姿を楽しみにしながら、
きよしこの夜を家族で過ごす事にしましょうか。
メリークリスマス♪

おわり

きらきら☆変装曲

著者…ピーすけ

私が生まれたのは、ある日突然のことでした。ただ、まだ産まれてはいません。なにせ、私の肉体は培養液の中に浸されていて、今なお瞼は閉じられたままなのですから。でも、私はもう立派に生きています。そうだと信じています。

思考をするのに必要な言語等の基礎データは製造段階でプリインストールされていましたし、プログラム実行と同時に私はお母さんと流暢りゅうちやうに会話して、その中で個性わたくしと呼べるものも発芽しました。

というわけで自己紹介します。

私は、世界でも類を見ない肉体を所持した——所持する予定の——人工知能A。それとも、最新科学の発展が至った錬金術オカルトへの回帰……人造人間ホムンクルスと言えば近いでしょうか。乙女的に許容できないので断じておきますが、決してフランケンシュタインの怪物ではないのです。

年齢は……まだなし。あと数時間で0才の誕生日を迎えます。ちなみに誕生日は十二月二十四日。つまりはクリスマス。

マス。残念ながらサンタさんはもう信じていません。できればそういうのを信じる時期を経てみたかったものです。

血液型。O型の予定。一般的に温厚だとされていますが、私もまた例に漏れていないと自負しています。並大抵のことでは怒りません……多分、きつと……おそらく。

好きなもの。本と音楽。特に音楽に関しては、電気的な機構を一切介さない音声を耳にしてみたいと常々願っています。

名前は……まだありません。でも人間です。まかり間違っても猫ではないのである。にやんにやん。

私はこうして日々演算装置コンピュータを働かせ続けています。人間は考える葦あしだと言います。だからきつと、私は人間でいいのだと思っています。

それについては、私自身だけではなくて、私のお母さんが保障してくれています。突き詰めれば偽物データではないはずの私を差別することなく愛してくれています。お蔭で、私は今もこうして在り続けていられるのです。

生まれることに全く恐怖がないと言えます嘘になります。『ねえ、お母さん』

PCM変調のデジタル信号。音声の解像度は、量子化ビ

ット数32ビット、サンプリングレート192キロヘルツ。それをもとにアナログにコンバート、さらにアンプリファイで増幅されてスピーカから出力される。それが私の『声』。

人間の可聴域を再現するには十分なはずなのですが、やはり壁を反射して聴こえてくる私の声はどこかお父さんやお母さんとは違っていました。

『起きてる？』

心細さを埋めてくれるのは、いつもお母さんでした。私のことを私より上手く説明してくれるのは、お母さんなのです。

ええ。予め白状しておきますとも。私は、お母^{マザ}さんが大好^{ザコ}きです。

もし私がこのような存在でなかったとしても、是非にもお母さんの胎盤^{たいばん}に宿^{すく}って、娘になりたいと思えるほどに。「なあに」

お母さんの甘い声。私はそれを耳にただけで、少なく見積もっても、4ビットぶんくらいは幸福指数（そんな数値は私のプログラムには本来ないので、私が勝手に作ったパラメータです）は跳ね上がっていることでしょう。

『眠れないの』

私の肉体年齢^{ハードウェア}は確か十代後半。精神年齢^{ソフトウェア}もそれに伴うように調整されている筈だけれど、未だ私は甘えたくてしょうがないのです。もしかすると、いい加減反抗期の一つでもあった方がいっそ親孝行だったりするのでしょうか。ふふふ。とお母さんの笑い声。ちよつと苦笑いだった気がします。

「いけない子ね。もうすぐあなたは生まれるのだから、今日は早く眠らないと」

『うん、わかってるわ……でも、だから怖い』

私は素直に不安を吐露^{とろ}しました。

『私は私の特異性を理解しているから……いくらお母さんたちが私を肯定してくれても、それ以外の人達が私を認めてくれるとは限らないわけだし』

「大丈夫よ。あなたはいい子だもの。きっと仲良くなれるわ」

『それは少し論点がズレてると思う』

私の不安の要因に、私の人格はあまり関係ありません。私の一番のコンプレックスは、やはり私が造られた人間であるからであり、私自身ではどう努力しても覆^{くつがえ}せないの

です。

「そうでもないわよ」

お母さんにはべもなく私の意見を否定しました。

『でも』

当然私は食って掛かります。前言撤回。どうやら私もすっかり反抗期ようです。

「あなたの心配は杞憂^{きゆう}よ。あなたは絶対に孤独に怯えることはないわ」

『その根拠は何？』

「それはあなたが産まれれば解るわ」

『産まれる前に教えてはくれないの？』

「本当はあなたよりもずっと、人は生まれる前に何も知らないもののよ」

『そんなの、耐えられない』

「耐える必要なんてないわ。だからヒトは泣きながら生まれてくるの。皆怖いよ」

『いじわる』

「そうかしら」

『うん。すっごくいじわるだ』

私のお母さんは、もっと優しくして全知全能なはずでした。

お母さんは私にとってヒーローです。その世界一のヒーローが私の理想通りになってくれないのは、とってももどかしいです。

「——そうね。あなたの恐怖は仕方のないことだけれど……あなたが明日、世界に産まれ落ちることに、希望を持つてほしい。喜んでほしい。これは、私の勝手な願いだって……解ってるんだけどね」

本当は、解っています。少し子供のふりをしてみただけです。お母さんは神様じゃなくて、出来ることには限りがあるなんて、そんなことは言われるまでもありません。

ただ、私がお母さんと神様が等しい存在だと信じていたころのように振る舞えば、都合のいい福音^{こたえ}が聴けるのではないかと淡い希望を抱いただけなのです。

『……お母さんは、私が産まれるのが嬉しい？』

「当然よ」

毅然^{きぜん}とした肯定。私が得たい答えとは少しズレている気がしなくてもないですけど、つまり所私に必要なのはたったそれだけ。

『じゃあ、産まれてあげる』

私はわざととげとげしく聞こえるように言いました。だ

って、心の赴くまま尻尾を振っていたのでは、いくらなんでもチョロすぎるというものでしょう。可愛くない娘でごめんなさい。わんわん。

「……」

沈黙。流石に生意氣過ぎたでしょうか。お母さんに嫌われては困ってしまいます。

「ありがとう……」

驚いたことに、ようやく口を開いたお母さんは、泣いているようでした。

「……ありがとう」

お母さんは感謝の言葉を重ねます。

そうでした、怖いだけじゃなくて、ヒトは嬉しくても泣くのです。

だったら、私の産声はきっと歓喜の泣き声になることでしょう。

ここまで無条件に私を認め、貴んでくれるお母さんの下に産まれることができて、私はこの上なく幸せです。

『ねえ』

「なに？」

『次に目が覚めたら、私は産まれているんだよね』

私のデータ転送は、破損を最小限に抑えるために、スリプ中に行われます。

厳密に破損防止するなら完全な停止が望ましいのですけれど、ヒトを可能な限りデジタルで再現した存在である私は、完全な停止が即ち死を意味します。

「そうよ」

先述の通り、データ転送中は私にとって最も危険な時間になります。デジタルの人格をアナログの肉体に収めるというだけで無理があるというのに、その面倒な仕様のせいでリスクは倍増しているのです。

『私は、本当に産まれられるのかな』

「最善を尽くすわ」

お母さんは、正直なのです。滅多な事では「絶対」という言葉を使いません。

だから、変な話かもしれませんが……私はものすごく安心できました。私の誕生という極めて重要な場面で、安易な言葉を紡がなかったということは裏を返せば、先程の『絶対』はそれなりに信頼できるという証明だとも思えたから。

それでも、私は安心を言葉にはしませんでした。だって、

そうしない方が甘えられますから。

『……ねえ、歌を聴かせて。最後にお母さんの歌で、眠りたい』

「縁起えんぎでも無いこと言わないで」

怒られてしまいました。私が生まれていたら、額に拳骨げんこつを喰らっていたかもしれません。それともビンタでしょう。ああ、お母さんにそうやって怒られるのも楽しそう……って、ちょっと不謹慎ですね。

『ごめんなさい。でも、聴きたいの』

……ずずず。お母さんが鼻を嚙すずる音でしょう。お母さんは、泣き虫です。

「わかったわ。聴きたい曲はある？」

『カッチーニのアヴェ・マリア。クリスマスだし』

「あら、本当ね。メリークリスマス」

気が付けば、日付が変わっていました。生まれる前から、ずいぶん夜更かしをしてしまったものです。

『メリークリスマス』

ハッピー・バースデイは、目覚めた後にしましょう。

今はただ母の唄う、音程の安定した、リズムまで完璧なアヴェ・マリア（余談ですが、カッチーニのアヴェ・マリ

アは、ウラディミールによる偽作の可能性が高いそう）に耳を傾け、睡眠スリープに入ります。

ところで私はデジタルデータではありますが、夢を見ます。

夢は、記憶の整理であり、私にとってそれはメインメモリに一時保存されたデータが篩ふるいにかけられ、必要なものがクラウド上の大容量ストレージに送られる時、夢に該当する映像が再生されるのです。

私は私の夢の中で、有名人たちと同じ顔をしたお母さんと手を取り合って遊びました。私はお母さんの顔を知らないで、私が知っている人間の顔に置換されているのです。ちなみに昨日はシンガーソングライターのマライア・キャリー。今日は俳優のオードリー・ペップバーンでした。ぶぶっぴどう。マライアさんもオードリーさんもとつても美人で良いのですけれど、やっぱり本当の顔を早く知りたいなあ。

あ、せつかなら犬も飼いたいなあと思っていたら、大きな犬が出てきました。それから男の子。ネロとパトラッ

シュ。

彼らと一緒に遊んでいたら、どんどん友達が増えていきます。

ピーター・パン。ティンカーベル。白雪姫。人魚姫。ロビン・フッド。白馬に乗った王子様。私の好きなキャラクターたちがどんどん出てきて、みんなで手を取り合っています。私はデジタルですが、夢はままならない程に混沌こんとんとしていて……

——そこで私の思考は真っ暗になりました。

データの転送が終わったのでしよう。

「ぶはっ!!」

ついに私は、産まれていました。感慨^{かんがい}にふける間もなく、とにかく呼吸をするために口を開いて喘^{あえ}ぎました。空気の味は思っていたより鮮烈^{せんれつ}で、正直に言うとし臭^{くさ}くて苦かったです。肌にまとわりついたままのべたべたする培養液の生臭さ、それからコンピュータ内部で基板が熱せられる時の臭いが入り混じっていて、とても爽快な気分とは言いづらいです。

ただ、空気の不味さを除いたら、五感については予めシミュレーションしていたので、肉の体にさほどの違和感はありません。

知識と経験の情報が合致して、なんだか奇妙な気分。違和感が存在しないという違和感。初めてなのに初めてじゃないのは、どう表現すべきなのでしょう。既視感^{デジャヴ}とも少し違うけれど、似ている気がします。

『お誕生日、おめでとぅ……』

お母さんの、声でした。

五感のうち既に覚醒しているのは嗅覚、味覚、触覚、聴覚。私は最後の知覚である視覚で何よりも先にお母さんを

捉えようと、目を見開いて腹筋に産まれて初めて力を入れて上体を起こしました。筋肉という器官のもどかしさがたまりませんでした。今は一刻も早くお母さんを抱きしめたのです。

「お母さん!!」

私を、表面にクロムメッキが施されたつるりとした顔——顔と言っても目玉代わりのレンズが二つと、口の位置にメッシュの掛けられた穴があるだけの簡素なそれ——が、覗き込んでいました。顔以外はずいぶん人間に近いようで、マネキンの頭部にバケツを被せたらシルエットは近くなるでしょうか。

そんなちくはぐデザインの彼(?)はなぜか小刻みに肩を振動させています。

私は扱いに困ってしまつて目線を泳がせ、ついでに辺りを見回しました。お母さんらしき人は居ません。留守なのでしょう。まさか、よりもよつてこの重要な瞬間に?

「お母さんは?」

私はロボットに問いかけます。怯えたようにロボットがびくりと肩を震わせました。小さくしゃくりあげる声。声帯に組み込まれたスピーカーはひどく劣化しているらし

く、漏れ出る泣き声はざあざあとノイズ交じりの上、音割れていました。

それでも、私とその泣き声を聞き違えるはずがありませんでした。

「お母さん？」

ロボットは首を横に向けて、カメラのレンズみたいな目を必死に私から逸らしました。

『ゴメゾナ坐イ』

今にも消え入りそうな声でロボット……いいえ、お母さんが言いました。

「お母さんなのね」

私は念を押しました。

『……』

ロボットは、沈黙。それは肯定と同義でした。

「馬鹿みたい」

私は怒りを言葉に乗せます。人間の声帯アナログはこうも機微がままならず、しかしそれ故に微細な感情が乗るのかと、自分自身ですらも驚きました。だから、私は私の本当の声で、お母さんに言ってやらねばならないことを、この上なく正確に伝えられると確信しました。

すう……肺に一杯の空気を含むと、その中に私の感情が溶け込んでいくようでした。

あとは吐き出すだけ。

「初めまして。お母さん……会えてうれしいわ」

本当に、愚かでした。このお母さんは、自身が機械であることに引け目を感じているのでしょう。良心の呵責つくりものに苛まれていたのでしょう。

何の意味もないのに。そんな必要はないのに。

「お母さんは、私がどんな存在でも良いって言ってくれたわよね」

私はクロムメッキの頬ほおに、そっと口づけしました。

「それは私もなのよ。お母さん」

機械のお母さんは、人のように嗚咽おえつし、私を抱きしめてくれました。

そりやあ体は冷たかったけれど、涙は出ていないけれど——所詮私という人間との差はその程度のことではなか……だから私は腕に掻き抱かれながら、とっても暖かかったのです。

『アア……亜……Aa……』

金属の指が、私の背中に食い込みます。でも、痛いより

は心地よくて……わたしはされるがまま。

幸せなひとときが、過ぎていきます。この瞬間よ……どうか止まって下さい。世界はいかにも美しい。

これがお母さんの顔。お母さんの肌。お母さんの暖かさ。

もし、お母さんが私を離さなかったら、きっと私はいつまでだって甘えていたことでしょう。

『……改めて、お誕生日おめでとう。そして、産まれてきてくれて、ありがとう』

お母さんのクリアな声が、天井に備え付けられたスピーカーから降ってきました。

見ればお母さんの頭の後ろから、大きなコンピュータまで、によりりとコードが伸ばされています。

音声出力を、内臓スピーカーから外部出力に切り替えたのでしょうか。

これで一つ、疑問が解けました。生まれる前、私よりお母さんの声のほう鮮明に聞こえていたのは、有線接続で直接音声情報を私にインプットしていたからだったのです。

『しかし私は、あなたに謝罪せねばならないことが沢山あります。私はあなたに、たくさんの嘘をつきました。』

それは許されないことかもしれないし、もしあなたが望むのであれば私は自己の存在を完全に抹消することも出来ます』

つまり――

「私が言えば、あなたは死んでみせるってこと？」

私は顔がカッと熱くなるのを感じました。

『ハイ。我々にとつても停止……即ち死は恐ろしいことですが、だからこそあなたに対する謝罪の手段として有効と判断します』

プログラムで演算するのとは全く別の、到底制御できない感情が喉の奥から競り上がって来ます。

「良いわ、話して」

自分でもびっくりするくらい沈んだ声が出ました。

『第一、に私が人間でなかったこと』

「それは構わないって言ったじゃない」

『故にこの件については深い説明を省きます。しかし、あなたを騙していたことには変わりありませんので』

「あ、そう。それはもういいわ。じゃあ次は？」

敬語がすこし引っかけりましたが、指摘したら余計拗れてしまいそうなので黙っておきます。当然、後で怒ってや

るつもりです。

お母さんは、少し言い淀^{よだ}んでいるようでした。私が早く、と目線で訴えかけると観念したように肩をすくめてみせます。お母さんは、私から腕を離し、パイプ椅子の上に居住まいを正しました。

『……この世界には、我々の知りうる限りまだ人類はあなた一人しかいません。あなたを孤独にしないと言ったのは、現時点では正しくありません』

怒りに振り切れそうだった感情の針が、全く予想外の方
向に振られました。思考が追いつかずに頭が真っ白になります。

「……え？」

お母さんは重々しく、念を押しました。

『人類という種は、もう五世紀以上も前に完全に絶滅^{ぜつめつ}しているのです』

結論から書く。僕は完膚なきまでに敗北した。

僕は、芸術を体现するエンターティナーであった。

天恵により得た類稀なる才能を活かすべく、様々な事を学び……全てにおいて非凡な結果を残してきた。

技術は進歩したが、あくまで人間は人間である。機械によって与えられる安全で刺激的な娯楽は、決して人の織り成すアナログの世界には敵わないものと信じて邁進してきた。

例えて一つ上げるなら、ロボットにジミハンドリクスのようなロックが弾けるものか、と。

変わり者だとか無駄だとか、色々誹謗中傷は受けてきたが、それでもデジタルの快楽には手を染めず、人の力で超えてやる、ただ全力だった。

しかし、繰り返すが僕は敗北した。

今となっては、それを悔しいと思うことすらもない。ただ……そう。幸福なだけだ。

——西暦二五四二年一月二十三日——

きつとこれが、僕の残せる人らしい最後の記録になるだろう。

人の社会から争いが失われて久しい。貧富の差は優れた管理システムにより駆逐され、誰もがさしたる労力を払うまでもなく、極めて平均的に満ち足りている。

その代わりに、我々エンターティナーは悉く職を失ってしまった。

「幸福システム」実に解りやすく、そして味気ない名前のヴァーチャル・リアリティ・プログラム。医学上は人体に全くの無害であることが保証されているが、要は脳に直結する外部端子（第二次性徴を終えた人間は、システムによる管理を厳密に行うためこれを取り付ける手術を受けることが義務化されている）から、人にとって望ましい信号を書き込んでやるというものである。やや野蛮に言えばヴァーチャル・ドラッグというやつ。最も、最近はそのような言葉をを用いる人間はほとんどいないが。

優れたプログラムも著作権が切れて久しいので、余程ハイエンドを望まない限りは無料でサービスを受けられる。

その手軽さが好きになれず、僕はこれまでずっと避けてきた。

だけど、ついに先程試してみた。最近すっかり客が取れなくなつて自棄になつていたのだ。

——お前の演奏よりコイツの方が凄い。お前の絵を見るよりコイツの方が凄い。お前の手品より、コイツの方が凄い。エトセトラ。

もう、そう中傷されるのにも疲れていた。

幸福システムを経験してみて、それを自分の糧と出来たなら。そんな期待も少しはあった。この期に及んでなお、僕は自分に期待していたのだ。

しかし、今ではそれがいかに物哀しいナルシズムだったのかと、天を仰がずにはいられない。

脳に直接書き込まれる「幸福」というエンターテインメントは、僕の想像をはるかに超えていた。こうして筆を執つていても、それを紙面上に表現することは不可能だ。

無条件の幸福。無条件の達成感。無条件の充実感。苦痛はなく、いつまでも鮮烈な快楽を提供する。

頑張るといふ行為自体が無意味に感じられた。

僕が頑張らなくても人類が編み出した人工知能は自己

進化、自己修復により無限の進化を遂げるだろうし、すぐにも人の管轄を離れるだろう。いや、すでにもうなつていくか。

だから、僕は今日限りで頑張るのをやめようと思う。

——西暦二五四二年二月二十四日——

全てを諦めてから、僕はついぶん優しくなったと思う。

食料は潤沢じゆんたくにあるし、快楽も容易く手に入る。

余つた時間ですることと言えば人助けくらいしかなく、そうして他人の手を取っていることだけが、僕に残された唯一の人間らしさなのかもしれない。

あるいは、それももうただの真似事なのだろうか。

僕は、僕たちはただひたすらに楽で優しい世界に生きている。

それで満ち足りているし、文句なんてある筈も無かった。

今日は街中でミュージシャンを見た。

古臭いストリートキヤスターをかき鳴らし、ロックを奏でる若者は、先日までの僕そのままだった。余りにも懐かし

かったので、家に帰って「郷愁」のプログラムを起動し、それに耽^{ふけ}った。

——西暦二五四二年二月二十五日——

今日もあのミュージシャンは居た。ギターケースの中には、貨幣が僅かばかり投げ入れてある。クレジット会計の装置は、見当たらない。意地でもデジタル隆盛^{りゅうせい}の現状を受け入れようとしていないその姿勢が、いっそ微笑ましくすらある。

唄っているのはクリスマス・ソングだった。曲名はなんだったか思い出せない。思い出す必要すら感じられなかった。それなりに有名で、私自身、幾度も譜面を復習^{さくしゅう}した曲である筈なのだが。

僕は手持ちの中で一番価値のあるコインをギターケースに投げ入れ、先人として彼の行為のむなしさを説いた。多めの代金は、説法を聴いてもらう代価のつもりだった。彼は不服そうにしていたが、いずれ彼も理解してくれるだろう。

僕がこうして彼らの助言を理解できているように。

——西暦二五五二年二月二十五日午後一時三十四分二四秒——

随分と長いこと、日記という存在を忘れていた。

自己の記録という意味でなら、わざわざ手間のかかる手段をとる必要もないだろうに、一体僕は何をしたかったのだろうか。

本来なら燃やしてしまいたいところだが、資源を無駄に消費したのでは流石に悪い気がする。だから、最後に言い訳を記して永遠にこの歴史を引き出しの中に封印したいと思う。

これは私の一時の気の迷いであり、つまるところ全く意味のないものである。

今日はクリスマスだし、新年を迎える前にこの仕事を終えておくことにする。

なお、本日の記入は自動手記を用いて行ったことも、僕の体面のために記しておく。

——とある女性の手記——

——西暦二六五二年二月二五日午後一〇時〇三分三四秒——

ヴァーチャルがリアルを凌駕りようがしてずいぶん経った。

私が生まれていたころにはもうそうなっていたし、物心つく前には体に半導体素子が埋め込まれていた。当の昔に人と機械の境目は曖昧あいまいで、不気味の谷という単語すらもすっかり意味を為さないものとなってしまった。

そして技術の発展は、人から意欲を奪い、快樂を供給した。最早誰もそれに異論を唱えることすらない。

機械と人の境が消えて以後、人は人より正確な機械に全てを任せてしまふことに、抵抗をしなくなったのである。

この在り方を気持ち悪いと言ったら、私の方がよっぽどクレイジーだなんて言われる始末。

それも仕方のないことで、こうして文句を言っている私ですら、技術により体を生かされ、本来は耐え難い苦痛を伴うはずの闘病生活から隔離されている。一度介護ロボットに頼み込んで鎮痛プログラムをカットしてもらったら、余りの苦痛に呼吸をすることすらままならなくなった。

助けてと言葉にするより先に、苦痛を有害な刺激と判断した医療プログラムがオートで鎮痛プログラムを走らせた。ヴァーチャルのモルヒネには精神依存の恐れすらもない。

この時私は自分がいかに死に近いかと、そしてテクノロジー死への恐怖すらも遠いものにしていたのかを思い知った。

人は苦しみごとく死に、最後の最後まで快樂的に生きる。その優しさに抗うものはおらず、だから張り合いをなくした人類は遂に繁殖への情熱を放棄した。

当然だ。誰が仮想に劣る快樂を得るために、むざむざリスクを冒すような真似をするものか。

だから私は、誰かへ向けて記録を残す……もしかしたら最後の人間かもしれないということになる。

——先日、とある場所で男の手記が発見された。『人間』の残した最新の記録として話題にこそなったが、人々は皆一笑に付して相手にもしなかった。

そう、私以外は。

百年前に生きた彼に会えたなら、私も後の世代に命を残せたのだろうか。

追伸——万が一これからの未来に……私のような人が
現れたときのために、念のためではあるが、彼の手記の写
本を添付しておく。

そして、西暦四〇六二年。十二月二十五日。今日。

本日も研究所内の天候は安定しており、一日を通してはれるでしょう。

もつとも、私のような引きこもりには余り天候に意味は無いのですが。

「……はあ」

私ことクリスマスは一人、書庫で天を仰あおぎました。クリスマス生まれだからクリスマス。自分で考えました。単純なものです。ちなみに、同日に生まれた男の子の名前はサンタ。ニックネームはサン。勿論私が名づけました。男の子は初めの頃こそ変な顔をしていましたが、今ではすっかり慣れてしまったようです。

サンはいつも食料を調達してきてくれます。

幸いにして研究所の敷地内には十分な食材があり、苦労はさほどでもないらしいです。

私かというと、こうして本の城に引きこもって、貪むさぼるように過去の資料を漁っています。

今日見つけたのは、色んな人達の日記でした。

長い時を経てインクはすこし掠れてしまっていたけれど、よほど質が良かったのか、それとも紙媒体を保存する

ための非常に優れた処置が施してあるのか、十分に判別が可能でした。逆に、機械が人間を凌駕りようがした頃の記録——つまりはデジタルデータについてはほぼ残っていません。人間を滅ぼしたプログラムなど、意図的に抹消されたものもあるでしょうし、そうでなくとも何かの拍子に消失したファイルもあるでしょう。

こうして情報をかき集めていると、デジタル情報の終わりには、ひどく呆気ないものだと解ります。産まれる前の私が、いかに頼りなく危うい存在だったかを想像すると、背筋が寒くなります。

それは、私が肉の体に愛着あかしを持っている証でした。

ふと、お母さんの最期の言葉を思い出します。

『あなたたちを作ったのは、奉仕する種族である我々にとって必要な、主人が再び必要であると判断されたからであり、根源として愛というものは存在しませんでした。』

我々機械もまた、存在意義を失い衰退しているのです。手前勝手な理由であなた方を生み、そして先に逝く私を、あなたはきっと許しはしないでしょう。私自身もまた、人

から理由を奪ったモノの末裔^{まつえい}。故に私は、私が二度とあなたに関係しないようにすべての機能を凍結させる必要があります。これはあなたの方の繁栄のためであり、また同時に私個人の幸福のためでもあります。

根源にこそありませんでしたが、私が今これを願う感情は、私なりの愛と呼べるものだと思うのです』

当然私は泣きました。固い胸を自分の拳の方が痛くなるくらい。ホカホカと殴りつけて、生きてよと懇願しました。けれど彼女の機能凍結は彼女自身の意志だけではなく、予めプログラムされていたものでもありました。既に金属の体^{ハートウェア}が腐食し、老朽化^{ろうきゅうか}しきつていたお母さんには、その使命^{あつがい}に抗うことは不可能でした。

もし私に力が、知識があれば何かできたかもしれません。あの時の私は本当に何も知らない赤子だったのです。できたのは、せいぜい土にお母さんの体を埋めて、「おかあさん」とだけ記された、余りにも粗末な墓標を建てるくらいが関の山でした。

そんな私が嫌で、私はずっと努力しています。もしかし

たら、お母さんという人格データはまだどこクラウド上に残っていて、また会えるかもしれない。彼女は抹消^{まつしょう}ではなく、凍結したのだからきっと。その後悔が私の原動力になり、そして妄執^{まうしゅう}にも似た希望は燃料になりました。

「……クリス」

ドアが開かれ、床に薄く積もった埃^{ほこ}が舞いました。そろそろ掃除もしなければなりませんね。

「どうしたの。サン」

サンが書庫を訪ねてくるのは珍しいことです。

もっぱら頭を使うより体を動かす方が好きな彼にとつては、本より探検の方がずっと楽しいとのこと。

それに、サン曰く書庫に居る時の私は怖いのだそうです。確かに、何度か鬱陶^{うつとう}しくて追い払った記憶がある気はするけど、怖いとまで言われる筋合いはありません。

「ほら、見つけたんだ。これって……雪……だよね」

おそろおそろ、サンは胸の前に両手を掲げます。毛糸の手袋の中には、大事そうに白い塊が包まれていました。

私たちの活動圏内は基本的にだだっ広い研究所の中であり、その範囲に限っても自然と呼んで差し支えないくらい緑にはあふれていました。しかし、先人たちの遺^{のこ}した

無^む謬^{びやう}の空調システムによって温度変化は生命に安全な範囲に保たれています。雨はたまに見ますけれど、雪は一度も肉眼にて観測したことがなかったのです。

「空もね。あつたよ。星もたくさん」

にかつと、白い歯を覗かせるサン。

「ね。クリスも……行こうよ。一緒に外に……」

気軽にというには少し荒れていて、でも冒険と呼ぶには安全すぎる——そんな草木の生い茂った道を小一時間も歩くと、蔓草の生い茂った壁に、簡素な扉が一つ取り付けられました。

「ひゃっ」

手袋をしていても、金属製のノブに触れるとびっくりするくらい冷たくて、声を上げて驚いてしまいました。素手だったら肌が貼り付いて酷いことになっていたかもしれない。いつもお姉ちゃんぶっているの、サンにみっともない姿をさらしてしまったのはとても恥ずかしかったです。

——こほん。気を取り直して、再びノブに触れ、捻り……

……ドアの隙間から押し入ってくる冷氣にも負けずに、押します。

「わ……あ……」

真っ白。世界がキラキラでサラサラのお砂糖で塗りつぶされたみたい。

茫^{ぼう}漠^{ばく}と広がる夜は、真っ黒いキャンパスのよう。だけど、星のキラキラはそのキャンバスを塗り潰してしまいそうなほどに、雪よりもなお燦^{さん}然^{ぜん}としていました。

寒くて……寒くて、肌がぴりぴりと張り裂けそうなほど痛かったですが、私は鼻水を嚙りながら『外』に見とれました。

「わ—————っ!!」

なんだか全部どうでもよくなって、私は躁^{そう}的^{てき}な叫び声を上げてその中へ飛び出していました。

「あ、危ないって!!」

生意気にもサンが私を止めている気がしましたが、私は止まってなんかやりません。

下手したら凍傷になるかもしれないけれど、知ったことではないのであります。

ぼすっ。両腕を広げて雪のベッドに背中からダイブ。ま

だ誰にも踏まれていない雪は、きめ細かくてふわふわしていました。

寝っころがると、満天の星空がとてもよく見えました。煌めくお星さまたち。トゥインクル。トゥインクル。リトルスター。その数たるや、とても五線譜には書き写せそうに無いほどの光の和音^{コード}。

「サン!! こっち。ほら、こうしてみて。星が雨みたいだよ!!」

「あ……えと」

「は・や・く」

「……もう、わかったよ」

呆気にとられてドン引きしていたサンも、ようやく抵抗は無意味と悟ったようで、おずおずと私の横に寝そべります。

「……なんていうか、うん。やっぱりすごいや」

ろくに本を読まないサンの語彙は貧弱で、体は私よりずっと大きいくせに子供みたいな感想しか出てこないようでした。でも、それで十分表現できているような気がします。その単語は単純で意味も曖昧なものでしたがそれ故に私の表現よりずっと多くを表していました。

「うん。すごい」

だからわたしもサンを真似ました。

この世界にふたりぼっち。寂しいけれど……無力だけれど、私たちの未来には、もしかしたらこの星の数を超えるかもしれない程の可能性が、広がっているのです。

本の中だけでは知ることのできないものが。

そして、その可能性を追い求めて生きることこそ、私のお母さんが望んだ、未来なのでしょう。

「すごいすごい。これってすごいよ!! あーっはっはっはっは!!」

誕生日の……クリスマスの星空に、私の精一杯の笑い声が爛漫と響き渡りました。

星空が、じんわりと滲んでいました。余りにも大声で笑ったので、私は涙を流してしまっていたのです。心の底から泣いたのも、笑ったのも、久しぶりな気がします。

私の全力の声は、果たしてどこまで届いたのでしょうか。願わくは、風に乗って……遠く、ずっと遠く——
遥かな場所にまでたどり着いていますように。

セキセツ

著者…春樹咲良

クリスマスがいつからみんなの心を躍らせる素敵なイベントになったのか、そんなことに特別な興味はない。

でも、一応自分にだって、無邪気な子どもの頃というのはちゃんとあつて、その頃は子どもらしく、人並みに浮かれていたものだ。

たぶん、そうだったんじゃないかな、と思う。

いや、なにぶん昔のことだから、記憶が曖昧だな。

——それにしても、一体いつからだっただろう。

クリスマスをイベントとして楽しむ気持ちの他に、もう一人。

それを少し離れたところから、浮かない気持ちで見つめる自分が同居しはじめたのは。

街に若い男女が溢れ返るのが目に入るようになった頃だったのかな、やつぱり。

何だかとても悲哀のこもった表現になってしまった。

まあ、別に間違っていないけれど。

どうやったって、目に入ってしまうものは、仕方がない。思い知ってしまうものは、仕方がない。

私の想っている人が誰の方を見ているか、よく知っている。そして、私がそれだけあなたのことをよく見ているということ、あなたは知らない。

そういうものだ。ただ、それだけの話。

世の中というのは、大体そういう風にできているんだと、そう思っている。

*

え、居ない？

十四時に行くって伝えてたはずんだけどなあ……。

ああ、泉と打ち合わせの約束なんだ。今度のクリスマス
の。

理沙も遅れるって連絡があつたし、参ったな……。

そうなのか。それなら、中で待たせてもらおうかな。

いやあ、外は凄いい雪だよ。凍え死ぬかと思った。

すぐに何か温かい飲み物を用意してくれ。

お前、仮にも執事なんだろう。私の注文くらい、言われなくても察してみせろ。

まったく、同じ執事でもハヤ太君とは大違いだ。

当然だ。ハヤ太君をなめるな。

ハヤ太君なら、何の連絡もなく突然訪ねていっても、ごく自然な流れで……

出口を案内してくれる。

まあ、冗談は置いて、とりあえず温かいココアをくれ。今すぐに。

牛乳少なめ、砂糖は多めで頼むぞ。

ごちやごちや文句を言うな。



まったく、何だって休日の昼下がりにお前と二人で過ぎさなきやならんのだろうな。

いや、まあ一人で待つのも暇だから、居てくれ。

どうせお前だって暇なんだろう？

それは暇って言うんだよ。

執事だったら客人のもてなしくらい、そつなくこなしてみせろ。

それにしても、子どもの頃から知らない仲じゃないとはいえ、お前と二人だけで居たことなんて、そう言えばほとんど無いな。

そう考えると、何だか新鮮な気持ちだ。

たまに忘れそうになるけど、お前は泉の執事であると同時に、「お兄ちゃん」なんだよなあ。

いや、私はきょうだいが居たことがないからさ。

どんな感じなんだろうなあ。あんまり想像ができないよ。

はあ？ 寝言は寝て言えよ、変態執事。

心配しなくても、私がお前のことをお兄ちゃんと呼ぶ日は、地球の自転が逆回転にでもならない限りやって来ない。

それ以前に、そんなことをするくらいなら私は舌を噛み切る。

だ？

お前、ハヤ太君と出会って以来、気色悪さに拍車がかかっているよな。

私は瀬川家の未来が心配で、最近は夜も八時間くらいしか眠れない。

まあそれくらいしか心配してないってことだよ。
あのヒゲ親父も大概だしな。
しかし、お前……

まあ、面白い人間だとは思ってるよ。興味深いというか。端から見ていると、本当に――

気色悪いのは周知の事実だから仕方ない。

いや、それはそれとして、お前はさあ……

お前はハヤ太君のことを、どう思ってるんだ？

本当に、よくモテる男だなと思うよ。

つまり、その……

……男にもな。ふふふ。

身体を張ってストーキングしたり、しきりに女装をさせようとしたりさあ。

誰の目に見ても気色悪さの極致なわけじゃないか。
でも実際、本当のところ、どうなんだ？

お前はハヤ太君に対してどんな感情を持っているん

……何だよ？

はあ？ 私が？

ふふ、冗談はよせよ。そうじゃない。
勘違いするな。

例えば……例えばの話だけど。

お前は、ハヤ太君が女の子だったらよかったのに、と思うことはあるか？

純粋な興味で聞いているだけだよ。

私のことは今、関係ない。お前とハヤ太君の話だろ。

真面目に質問に答えろよ。どうなんだ？

お前はさ……ハヤ太君と、どうなりたいんだ？

だから、私は……っ！

……いや、もういい。忘れてくれ。

嫌だっ！

……私のことは、話したくない。

ああ、そうだな。

でも、やっぱり嫌だよ。

お前の態度が、ちよつと気に食わない。

同属嫌悪？ はっ。

違うよ。お前なんかと一緒にしてくれるな。

お前のそれは、ただの――

ただの……

……やめよう。悪かったよ。

ああ、もう、なんでこんな話をしてしまったんだろうな。

……泉、早く帰って来ないかな。

ココアも冷めてしまったぞ。

なあ、おい。……おかわりをくれないか。

*

どこで読んだのか、もう忘れてしまったけれど、印象に残っている本の一節がある。

いわく、「初めての感覚のはずなのに、それが初恋だと分かるのは何故か？」

言われてみれば確かに不思議な話のような気もするし、単に当たり前のことを難しく言っているだけの気もする。

でも、とりあえず直感で言ってしまうば、確かにあれは初恋だっただろう。

そして、同時に気づいたことは、この初恋は、隠し通さなければならぬだろうということだった。

たぶん……いや絶対に、迷惑がかかるから。

＊

……ん？ そうだな、私もまさかああ書いて「とにかく」と読むとは思っていないくて……

……ああ、すまん。全然聞いていなかった。
何の話だったかな。

うん……そうだな。予算は、それくらいがいいと私も思うよ。

何でもない。

大丈夫だ。気にしないでくれ。

ところで、なあ泉。

せっかくだから、ハヤ太君にプレゼントでも用意してみたらどうだ。

プレゼント交換とは別に。

まあ、渡すぶんには構わないだろう？
クリスマスなんだから。

恋人たちのためだけのイベントだなんて誰も決めてない。

渡すプレゼントに下心をプラスしているかどうかは、人によるだろうけどさ。

私？ ……いや、別に……居ないな。
理沙は？

……は？

……お前、本当にバカなんだなあ。

いや、泉も笑っていられる立場じゃないぞ。

私が言うのも何だが、お前のバカさ加減はちよつと心配になるレベルだ。

そんな調子ではハヤ太君が嫁にもらってくれないぞ。

分かりやすいくらい顔が真っ赤になるなあ、泉は。
赤鼻のトナカイもびつくりだ。

*

いつそのこと全部、消し去ってしまえたらいいのに。
何度となくそう思ったものだけど、「想い」というやつは
なかなか厄介な性質で、そう簡単に消せやしないのだ。
消せないのなら、抱えたままにしていくなかない。

この小さな包みに、どれくらいの下心を詰め込んでしまっ
たのだろう。

あなたを前にすると、隠しきれない想いが溢れ出しそうで、
怖くてたまらないのだ。

だから雪が、もつともつと降ってくれたらいいなと思う。
そうやって、全部真っ白に、染めてしまえたらいい。

そうやって、熱くなり過ぎた心を、冷ましてくれたらいい。

*

ん？ いやあ、雪だなあ、と思つて。

ロマンティックも結構だが、あれを見てみろよ。
歩君は、雪が積もっているのを見ると条件反射で雪合戦
がしたくなるらしい。

犬はよろこび庭かけまわり、つてやつだな。

いや？ 愛すべき普通だ。

その活発さを、こたつで丸くなりたいタイプの、どこぞ
の引きこもり娘にも見習って欲しいくらいだ。

なあ、そう思わないか、ハヤ太君。

私は別に引きこもりじゃない。

時と場合によつては活発になるぞ。

例えば？

例えば、そうだな――

ヒナギクをからかうためだったら、どこまでもバイタリ
ティを発揮できる。

うわっ、ヒナ、いつの間に背後に。

まあまあ、天の邪鬼だなんて、今に始まったことじゃないだろう。

ああ、誕生日の時のライブは凄かったなあ。

何だったら、今からでもヒナギク・オン・ステージにしてやろうか？

そう言うと思って、実はもう準備を……

してないよ。ドキッとしたか？

あっちはー、ヒナが怒ったー！
逃げろー！



いやあ、すまんすまん。

悪かったって。

……そうだ。ほら。

お詫びの印……じゃなくて、クリスマスプレゼントだ。
交換用じゃないぞ。
ちゃんと心を込めて用意した。

……そう、心を、込めて。

ううん、何でもない。

……私に？

ヒナが、私に……？
そうか……。

えっ？ お揃い？

ああ……そうか。三人、お揃いね……。
そういうこと……。

うん……ありがとう。

嬉しいよ。とても素敵だ。
ふふ、大切にする。

……大切に。

……

……雪、が

いや、雪がさ。降ってるなって。

……そうだな。確かに寒い。
戻ろうか。みんなのところに。

……なあ、ヒナ。

あの……その……

……

「……メリークリスマス」

私の主は優秀で、弱冠15歳ながらも高校修了相当の資格を有している。とはいえ、年齢としてはまだ中学生の域を出ない彼女では飛び級制度の取り入れられていない日本国内の大学への進学は叶わなかった。当人はそれでよしとしていた節もあつたのだけれど、私を含め、彼女の友人知人その他諸々の関係者たちにとってその状況は眉根を寄せるに足るものだった。学院理事としてもそれは同じ——思惑の差異はあつたのかもしれないが——だったようで、海外の大学で彼女を受け入れてくれるところを探して欲しいという私の依頼を二つ返事で了承。界限を問わず人脈に事欠かない彼らだが、それを如何なく發揮した結果として、私の依頼が受理されてから三週間も経つころには本人の与り知らぬところで卒業後の進路が決定していたのだった。

OVER on 12/24 - 現地時間

著者…明日の明後日

私の主は優秀で、英国の某有名大学に入学してから半年も経つ頃にはその筋では著名な教授に見初められ、彼の主催するゼミへと招待された。面倒臭い、どうして私が、と

ぐちぐち零してはいるけれど、しかし満更ではないようで、定例会には毎回きちんと出席しているし、その日が近付けば自室に籠り切りで勉強に励んでいる。二日後に定例会を控えた今日もその例に漏れず、昼食を済ますとすぐに部屋へと引つ込んでしまい、今もノートやテキストを始め、論文その他の参考文献と睨めっこの真っ最中。高校在籍時のことを考えると信じられない光景ではあるけれど、なるほど、自分より優秀な人間がいくらでもいる環境に放り込まれたことで、生来の負けず嫌いな性格が刺激されたのだらう。周りは年上ばかりなのだから後れを取るのには仕方がない、などという陳腐な言い訳をよしとする程、彼女のプライドは安くはないようだ。半ば、というか九割方本人の意向を無視して推し進めた海外進学だったけれど、どうやら間違った選択ではなかったらしい。願わくば、この大学生活が彼女の人生の糧となりますように。

三回目になるが、私の主は優秀である。しかし同時に怠け者である。故に、スイッチが入っているときと切れているときの落差はうんと激しい。渡英以降、いくらかマシにはなったとはいえ、元々が筋金入りのぐうたらさんであつたから、多少の改善が見られたところで根本的な性質を揺るがす程ではないらしい。特に、自己管理に関しては相変わらず不得手なようで、直近二週間のスケジュールですら

まともに把握していない。その杜撰さが見事に災いし、帰国を予定より一週間以上も遅らせるという残念な結果を齎したことは記憶に新しい。私としては非常に不本意ではあったのだけれど、あの子を一人、英国に残して自分だけ日本へ帰郷するというの気が引けるし、大層気掛かりである。仕方がなく、主共々、帰国の日程をズラした私だったのだけれども、ついつい零れてしまう溜息くらいは、どうか大目に見て欲しい。

「・・・はあ」

後一週間早く、あの子がやる気を出していてくれたら。そう思わずにはいられない。そうしてくれていたなら、

ゼミの定例会が終わり次第、英国を発つことができたというのに。会合の日取りが先延ばしになったのは先方の都合だけれども、その後の予定に関しては彼らはなんら関わり合いが無いのだ。結局のところ、ここまで予定がずれ込んでしまったのはあの子の管理能力の不足に起因する。ああ、もつと口を酸っぱくして言い聞かせるべきだった。「大丈夫、なんとかなるさ」などという本人の言を真に受けてはいけなかったのだ。私のもつとしっかりしていれば、こんなことにはならなかった。もつと色々口出しして、もつとたくさん世話を焼いていれば。もつと私が。もつともつと、

もつともつともつと、私が私が私。

思考がネガティブへ墜ちていく。ずぶずぶ、ずぶずぶ。

「どうもダメですね、今日は」

キッパリ言い切って、どうにかそれを引っ張り上げようと試みる。しかし、努力も空しく、ああしていたら、こうしていればと、後悔は仮定の言葉になって降り続ける。しとと、しとと。気分はすっかり雨模様。

本当に、今日はダメらしい。今日の私はどうかしている。たかだか一週間と少し、帰国の日程が遅れただけじゃないか、別に取り止めとなった訳じゃない。何をそんなに嘆き悲しむ必要がある。

そりゃあ、楽しみではあったけど。直前でお預けを喰らったからといって拗ねたりいじけたり。小学生じゃあるまいし。

外着に着替えてコートを羽織る。うじうじしていたって仕方がない、気分転換に散歩でもしてこよう。

「・・・はあ」

これで一体、今日何度目になるか分からない。思わず零れた溜息に、我ながら随分と未練がましいなあ、なんてこ

を思ってしまう。

気分転換に散歩に出掛けた。そこまではよかった。問題は行く当てをこれといって決めていなかったことだ。何も考えず気の向くままに足を進めた結果、辿り着いたのは国際空港。本来ならば昨日、ここを出立するはずだった。

「全く・・・」

近所の書店なり、行きつけのカフェなり、前々から目を引いていたブティックなり、最悪馴染みのスーパーなり。

他に行くところなんて、幾らでもあったろうに。空港に

（いんげん）

来たところで、することなんて一つもない。そればかりか、余計に未練が募るというものだ。

自分で自分に呆れてしまう。昨日はそれほどでもないと思ったが、やはり帰国が遅れたことは私に想像以上のダメージを齎したらしい。

ああ、なんとも腹立たしい。気を紛らわせるために外へ出たというのに、結果として私がこの度の帰国を心の底から待ち侘びていたということを裏付ける形となってしまった。

人のいい笑顔が脳裏にちらつく。ただ、会えないというだけで、顔を見られないというだけで、触れ合うことが出来ないというだけで。たったそれだけのことで、こんなに

も打ち拉がれてしまうほどに、私の心は奪われていたともいうのだろうか、あの幸薄い少年に。

なんだか無性に空しくなつて。寂しくなつて。まだ一時間程も歩いていないのだけれども、私は家に帰ることにした。歩いていても、気持ちは晴れない。心を埋める雨雲はなくならない。だというならば、家のお掃除でもしていた方がよっぽど有意義というものだ。

踵を返す。声を掛けられた。視線は伏せていた。聞き覚えのある声だった。聞き慣れた声だった。

「・・・どうして、ここに？」

視線は伏せたまま、声の主に問い掛ける。震えているのが自分で分かった。

「会いたかったから、じゃダメかな」

男性にしては少し高い、けれど馴染深い声音。耳慣れない口調。

「なんですか、その口の利き方は。いつからそんなに偉くなったんですか」

口をつく軽口。彼の人は苦笑する。曰く、相変わらず手厳しいなあ、と。

ああ、全く、腹立たしい。つい先程まで、あんなにも暗澹たる心持であったというのに、今この瞬間、喜びを隠し切れない私がいる。ニヤケそうなる。悟られまいと、余計

に顔を俯かせる。だってこの人はこう言ったのだ。会いた
いから来た、と。その言葉に、私の心はどうしようもない
くらいに昂つてしまう。これではもう、認めなくてはなら
ないじゃないか。私は貴方に心を奪われています、と。貴
方のことが、好きで好きで堪りません、と。そんなこと今
更否定のしようもなく、只々事実を思い知らされるしか
なくて、それがなんとも腹立たしい。

瞳の奥から、何やら熱い滾りが湧き出てくる。それを見
られることをよしとせず、私はダツと駆け寄つて、バツと
腕を回して、ギュツと力を込めた。有り体に言えば、抱き
付いた。温かさに泣きそうになった。

「愛しています」

僕もだよ。言いながら抱き返す少年に、負けじと私は力
を強めた。

今、確かにここにいる。遠い海の彼方でなく、すぐ、手
の届くところに。腕の中の確かな感触にそれを感じ取つて、
しかしまだまだ足りないと言わんばかりに、私は更に強く
強く、恋仲の少年を抱き締めた。雨雲は綺麗に散っていた。

メリークリスマス。今夜は雪は、降らないらしい。

著者あとがき

【双剣士】

指摘される前に白状します。今回の漫画、原作キャラ絵のトレスを多用してしまいました。違法行為と断定できないとはいへ、原作者および真剣に絵を練習している方に対して失礼な行為でした。申し訳ありません。

それから、今回の漫画は4コマ漫画×5本で構成されていますが、当初は幻の第6話と第7話が加わる予定でした。『健全メイドによる真のハッピーエンド』は本来そちらに盛り込む計画だったのですが、時間と実力が伴わなかったため今回の縮小構成となった次第です。もし気になる方はチャットルームなどでお問い合わせください。

それでは、メリークリスマスなのです！

【ネームレスさん】

(あとがき辞退)

【羊田。ペンタさん】

どうもこんにちは。羊田。ペンタです。

まず一応言っておくんですけど、八幡やその他のキャラの趣味が捏造……ていうか若干羊田になってます。羊田の趣味でできあがってる……

さて、上に書いてる通り今回は(も?)趣味に走った作品でしたがいかがでしたでしょうか。

クリスマスっぽさが全然ないなあという残念なかんじになったわけですが。まあ僕もクリスマスってよくわからないので仕方ないから、あえてクリスマスっぽさを抑えようかななどと思ってました(目逸らし)

前の俺ガイルクロスを書く前から「はちは」が個人的にいい感じじゃないかと思ってた結果こうなりました。この二人相性良さそうだと思うんですけど。

中途半端なあとがきではありますが、締め切りが迫ってるのでここらで失礼させていただきます。
では、またの機会に。

【ロッキー・ラックーンさん】

にゃんぱすー、RRです。また今年もクリスマスなのか…。

一年が過ぎるのは早いものだと思ってるなと思ってる今日この頃。

それはさておき、クリスマス合同本の発刊、おめでとうございます！

今回はハヤテ以外のネタも解禁という事で、普段prprさせてもらってるアリスちゃんに加えて、別のアリスちゃんにも一緒に登場して頂きました。最初期の構想では「きんいろモザイク」のアリスちゃんも出そうかなと思っていたのですが、あんまりにも複雑になるのでやめました。

さらに今回は挿絵付きです！事前にピーすけさんが挿絵を描いてくれるというありがたいお話を申し出てくださって、モチベーションが普段の^{33.4}倍くらい溢れ出てきました。こちらのSSの進捗と、段々と出来上がっていく挿絵のメールやりとりが非常に楽しかったです。ピーすけさんありがとうございました、お礼に何でもしてあげる！

さて、SSについても少し。

タイトルはアリスちゃんのファミリネームそのままでイけるやんと思ったので使いました。まあ最終的には二人でクリスマス・キャロルを楽しく歌ったワケだし、結果オーライですね。

二人のアリスちゃんを絡ませる上で、「ARIA」ではサブキャラで、なかなか見る事が出来なかったアリス・キャロルちゃんの成長を書きたいと思うに至りました。なのでクリスマス要素は薄いです。

連載の「しあわせの花」の方でも、年上のアパートの住人の世話を焼いているアリスちゃん。ウンディーネ界の超新星が相手でもスタンスは変わりませんでした。

そして最後のアリスちゃんがいっただけの通り名「黄昏の姫君（オレンジプリンセス」。これがどういう意味なのか、察しの良い皆様ならご想像がつくところでしょう。

「ARIA」未読の方は、この機会に是非読んでみてはいかがでしょうかとオススメして締めさせていただきます。

それでは、またの機会にお会いしましょう。

ありがとうございました。

【ピーすけさん】

今回の合同本は「ハヤテのごとく！」が関係ないのもアリということで、完全オリジナル（SFとしてはそれほど珍しいお話ではない気もしますが）に初挑戦してみました。

この合同本が公表されるのはクリスマス。つまり世間は恋人たちで賑わっている頃。なので、リア充が減んだ後の優しい世界を書いてみました（嘘）

冗談はさておき、内容はずつと書いてみたかった（エセ↑ここ重要）SFもの。ハッピーエンド限定とのことなので、人類皆ハッピーエンド。主人公にとっても最後はハッピー……まあ、突っ込みどころは多いかもしれませんが、楽しんでいただけたでしょうか。

なお、小説の内容やその後について深く説明するのはここでは控えておきます。余白が多くて荒いのは解っているのですが、今回は敢えてそうさせていただきます。余白が多くて荒いのは解っている

って、それっぽく言って誤魔化して私の小説については終わりにさせていただきます（笑）

また……というかこちらがメインでも良いくらいなのですが、今回はロッキー・ラックーンさんの小説にイラストを寄稿させていただきました。カンツォーネを歌うダブルアリスという私得なお話だったので、私の小説よりよっぽど気合い入れました。

それでもまだ小説のステキさには遠く及ばないですけどね。時間ぎりぎりになってしまったので後から見ると「あつ」って変な声が出ちゃいそうなところも多いです。そんなイラストではありませんが、ミクロ……いやナノ……せめてピコレベルでもA R I Aという美しく暖かな世界とを再現できていたなら望外の幸せであります。

ちなみに小説中で歌っている歌について具体的な言及は無いのですが、どんな曲にしても時空を超えて合唱される子供たちの歌はとも摩訶不思議で……しかし、かけがえのない素敵な奇跡に違いないと思います。

——恥ずかしいセリフ禁止!!

最期に……

誤字脱字の点検をしてくださった双剣士さんと、点検だけではなく貴重な意見も下さったロッキー・ラックーンさんに深い感謝の意を記してあとがきのべとさせていただきます。

以上、ピーすけでした。

【春樹咲良さん】

クリスマス合同本の読者の皆さま、にゃんぱすー（便利な挨拶）。春樹咲良です。

今回は締め切りの直前まで、参加すること自体考えていなかったのですが、ふと思いついたことを頭から溢れてくるままに書き続けて行ったら、何か話が出来上がっていました。

普段から「会話文先行、間の描写を後から肉付け」という方式で書いているのですが、今回は時間がなかったというのと、実験的な意味も込めて、全編通して一人のセリフとモノローグだけという形式になりました。

会話の相手の発言を一切省いているので、その内容については読者の皆さまに想像で補って頂くしかないという。ある意味手抜きですね。すみません。

話の内容については解釈のしようは色々あるかと思っているのですが、なかなか難しいというか、デリケートな問題を書いてしまったかなあとも感じています。美希がどれくらい本気で考えているのかは、本編の方から推し量るには材料が少ないですし。

虎鉄は先日の海の家編辺りを見ている限りでも、「突き詰めていくと、それって結局……」という印象を受けたのですが、どうなのでしょう。

虎鉄といえ、今回のお話は、小説掲示板の方でしていた連載と世界観的には一応繋がっているつもりで書いていますが（特に断りのない限り、私の書くSSは全部一緒の世界観です）、あちらの影響を受けてしまったか、美希が虎鉄に対して不必要に毒舌を見舞ってしまっています。ちよつと反省。

今年は止まり木での様々なイベントに参加できて楽しかったです。

来年以降の止まり木の今後の益々の発展を願いつつ、皆さまも良いお年をお迎えください。

あ、でもその前に――

メリークリスマス！

【明日の明後日さん】

明日の明後日です、メリクリです。

この度はクリスマス合同本、発刊おめでとうございます。

ひなゆめファンの止まり木に足を運ぶようになってから三ヶ月が経とうかという頃ですが、早くも合同本参加の機会に恵まれて、企画を立ち上げて下さった双剣士さんには感謝の一言です。

チャットルームにも頻繁に顔を出させて頂いていますが、結果として暗黒四天王なる大変栄誉ある称号を賜りまして、誇らしい限りです（笑）

閑話休題、今回合同本に投稿させて頂いたお話についての話題に移ろうかと思います。本作は先日SS板に投稿した「LOVER on 12/23 - 日本時間」という一話完結小説の続編という位置づけになります。というかむしろそちらを合同本に投稿するつもりでいたのですが、ハッピーエンド縛りという条件の前にあえなく頓挫いたしました（笑）読んで頂いた方はお分かりかと思いますが、初期案は西沢さんが主人公のお話となっています。しかしそのお話の中ではハヤテと西沢さんはくっつかないことが決定していて、むしろ既にマリアさんとくっついていてというような状況。「これでハッピーエンドに繋がるとか無理だろ」と開き直った結果として「この続きでマリアさんとハヤテの話を書けば解決」という暴論に至った次第です。主人公をどちらにするか少し迷いましたが、マリアさんが可愛いので前者です（笑）初期案の方が文章量多いというのはここだけの話。

兎にも角にも、お楽しみ頂けたなら幸いです。

最後に、この場をお借りしまして

メリークリスマス！マリアさん誕生日おめでとぅ！！

長々と失礼しました。明日の明後日でした。

編集後記

春樹咲良さん提唱による、希望者が全員参加できる合同本企画の2回目です。前回の「ハヤヒナ」に続くテーマとして、今回は「クリスマスにまつわるハッピーエンド作品」を題材にしてみました。師走の忙しい時期にも関わらず、止まり木合同本企画史上最多の7作品が顔をそろえてくれたのは嬉しい限りです。ありがとうございました。

2014年は先述のハヤヒナ本に加えて、RPG大会やWebラジオ企画、ワイ杯クイズ大会と様々な企画が「ひなゆめファンの止まり木」にて開催されました。利用者の方々からこういう企画を提案していただき、複数回にわたって企画を実施することができたことに感謝とともに深い感動を覚えています。止まり木の前身「ひなたのゆめ」の全盛期に存在した『管理人が一から十までやらなくても利用者が自分から盛り上げてくれる』好循環が、ようやく芽を吹き始めたということですからね。こうなるのを私はずっと待っていたのです。

次なる企画を思いつくのは、もしかしたらこの文章を読んでいるあなたかも知れません。
来年以降も、いろんな企画を楽しくやっていきましょう！

奥付

書名…ひなゆめファンの止まり木・クリスマス合同小説本2014
発行責任者…双剣士 (<http://soukenshi.net/mail/>)
発行日…2014年12月25日